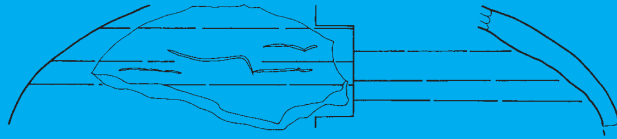


遠 台 遺 跡
(第18地点第4次)
八幡神社周辺古墳群
(第1地点第3次)

那珂川沿岸農業水利事業（二期）高根幹線水路工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



2018

水戸市教育委員会

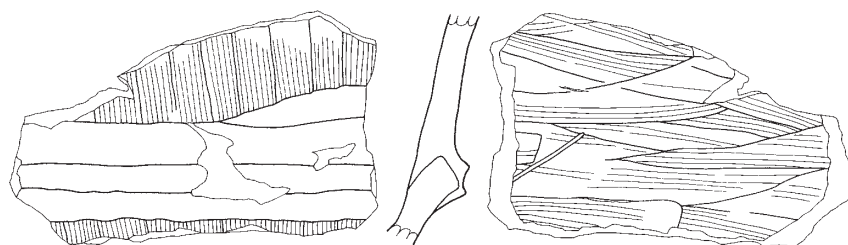
遠 台 遺 跡

(第18地点第4次)

八幡神社周辺古墳群

(第1地点第3次)

那珂川沿岸農業水利事業（二期）高根幹線水路工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



2018

水戸市教育委員会

ごあいさつ

水戸市域の西側である内原地区には、茨城県下でも有数の古墳群が存在し、集落跡や城館跡など、数多くの埋蔵文化財包蔵地が分布しております。これは、八溝山系の山並みと桜川や古矢川、涸沼前川によって育まれた豊かな自然のもと、私たちの祖先が連綿とその営みを大地に刻んできたことの証です。また、奈良時代に編さんされた『常陸国風土記』那賀郡条には、朝房山を舞台とした晡時臥山の神婚説話が紡がれ、この地域が歴史的にも豊かな環境を有していることを物語っております。

これらの埋蔵文化財をはじめとする歴史的文化遺産は、その性質上、開発などによってひとたび壊されてしまうと、二度と現状に復すことはできません。そのため、私たちひとりひとりが大切に保存しながら、後世に伝えていかなければなりません。

今回、発掘調査を実施した遠台遺跡、八幡神社周辺古墳群が位置する杉崎町・中原町及びその周辺地域は、近年徐々に宅地化が進んでおり、その景観も少しずつではありますが様変わりしています。本市教育委員会といたしましては、これら開発やライフラインの整備と文化財保護の両立を図りながら、文化財保護の意義や重要性を踏まえ、文化財保護法及び関係法令に基づいた保護・保存に努めているところです。

このたび計画された那珂川沿岸農業水利事業に伴う水路工事につきましては、文化財保護の観点から遺跡への影響を考慮し、関係各所との十分な協議を重ねてまいりました。その結果、今回の計画によって、試掘調査によって確認された埋蔵文化財の現状保存が困難であるとの結論に至り、次善の策として、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなりました。

今回の調査では、奈良・平安時代の集落跡が眠ると考えられていた遠台遺跡において、近世初頭の城館跡に伴うとみられる堀跡が発見されるという、これまでにない重要な知見を得ることができました。

また、八幡神社周辺古墳群では、第11号墳の周溝から出土した埴輪から、6世紀前半頃という築造年代を明らかにすることができました。

ここに刊行する本書が、本市のかけがえのない、貴重な文化財を大切にする意識の高揚と、郷土愛の醸成の一助となることを願うと共に、学術研究等の資料として、実り豊かな地域史を紡ぎ、次なる世代へと繋いでゆくバトンとして、広く御活用いただければ幸いです。

末尾ながら、今回の調査実施にあたり、多大なる御理解と御協力を賜りました、地権者様をはじめ沿線にお住まいの皆様方、関係各位に心から感謝申し上げます、ごあいさついたします。

平成30年8月

水戸市教育委員会

教育長 本 多 清 峰

例 言

- 1 本書は、那珂川沿岸農業水利事業（二期）高根幹線水路工事に伴う遠台遺跡（第18地点第4次）と八幡神社周辺古墳群（第1地点第3次）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は、株式会社地域文化財研究所の調査支援を受け、水戸市教育委員会が主体で行った。
- 3 調査概要及び調査組織は下記のとおりである。

所在地	茨城県水戸市杉崎町 2267 付近～中原町 1020 付近
調査面積	259.6 m ²
調査期間	平成 30 年（2018）2 月 15 日～同年 4 月 3 日
調査主体	水戸市教育委員会
調査担当者	米川暢敬（水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課埋蔵文化財センター）
調査支援	間宮正光（株式会社地域文化財研究所）
調査参加者	野村浩史 高安幸且 高安丈夫 小坂部克己 飯田 昭 大山年明 石島 昇 市毛祐一 岡部五男生 長峰和行 大里行弘 根谷 稔 八巻省三 芥川 彰 小野健治 角谷秀夫 出川 孝 加賀谷則雄 川村理華 木村春代 増田香理 小林真千子 藤井陽子
事務局	関口 慶久（埋蔵文化財センター所長） 米川 暢敬（埋蔵文化財センター主幹） 新垣 清貴（埋蔵文化財センター主幹） 太田有里乃（埋蔵文化財センター主事，～平成 30 年 3 月 31 日） 廣松 滉一（埋蔵文化財センター文化財主事，平成 30 年 4 月 1 日～） 丸山優香里（埋蔵文化財センター囑託員） 染井 千佳（埋蔵文化財センター囑託員） 松浦 史明（埋蔵文化財センター囑託員） 有田 洋子（埋蔵文化財センター囑託員） 昆 志穂（埋蔵文化財センター囑託員） 米川 健太（埋蔵文化財センター臨時職員，平成 30 年 5 月 1 日～）

- 4 本書は、間宮、米川、関口が分担して執筆し、米川の助言・指導に基づいて間宮が編集した。
- 5 執筆分担は、第 1 章第 1 節、第 2 章が米川、おわりにが関口、その他が間宮である。
- 6 出土遺物及び図面・写真などの記録は、一括して水戸市埋蔵文化財センターにて保管・管理している。
- 7 調査においては下記の方々にご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表するものである。（敬称略・順不同）

齋藤弘道 鈴木 徹 比毛君男

農林水産省関東農政局那珂川沿岸農業水利事業所 茨城県教育庁文化課







上高津貝塚ふるさと歴史の広場 高橋建設工業株式会社

凡 例

- 1 本書は、遠台遺跡の第18地点第4次調査と八幡神社周辺古墳群の第1地点第3次調査の成果を収録した。遺構番号など記録は遺跡毎に行っている。
- 2 調査において使用した略号は次のとおりである。

遠台遺跡第18地点第4次 …… ウ002-018-4
八幡神社周辺古墳群第1地点第3次 …… ウ011-001-3
堀跡、周溝 …… SD 井戸跡 …… SE
- 3 古墳番号について、旧内原町のNo.200とされていた古墳は、平成17年(2005)の市町村合併後、八幡神社周辺古墳群第11号墳となっており、本書では第11号墳に統一して使用している。
- 4 測量は、国家標準直角座標IX系(世界測地系)に基づいた。遺構実測図中の方位は座標北を示し、土層断面図及び断面図に記した数値はそれぞれ標高を示す。
- 5 遺構の計測は壁上端を基準に行った。主軸方向は長軸線を軸線に、座標北に対して何度偏針するかを記載した。深度は検出面からの深さである。なお、堀跡内ピットの深度については、最も遺存する部分を基準にしている。
- 6 色相は、農林水産省農林水産技術会議事務局他監修の『新版標準土色帖』に基づいた。
- 7 遺物の年代は、中世においては全国シンポジウム『中世窯業の諸相』及び茨城県考古学協会シンポジウム『茨城中世考古学の最前線』で提示された編年、近世瀬戸・美濃製品は「瀬戸窯編年」を主に用いた。
- 8 出土遺物観察表中の計測値は()が復元値、〈 〉が残存値を示す。単位はcmである。
- 9 出土遺物観察表及び出土遺物集計表、写真図版中の遺構名は略号を用い種別毎に記載した。
- 10 出土遺物の集計は、接合後各遺構毎に約1cm四方以上に対して行った。その際、1/2以上残存するものを個体とし、それ以外を破片とした。なお、同一個体とみられるが接合関係にないものは全て破片として扱った。また、産地不明陶器で可能性が指摘できるものはそこへ含めて集計した。
- 11 掲載遺物には、遺構毎に番号が付されており、本文・挿図・写真図版共に一致している。
- 12 表紙に使用した図は、八幡神社周辺古墳群出土の渥美・湖西系製品の壺(遺構外-7)、中扉が同じく朝顔形埴輪(SD01-6)である。
- 13 本書に用いた基本的な挿図縮尺及びアミかけなどは下記のとおりである。

挿図縮尺 遺構：全体図 …… 1:400 堀跡、周溝 …… 1:80 井戸跡 …… 1:60
遺物：土器・陶磁器 …… 1:3 石製品 …… 1:3 (砥石 1:4)
金属製品・炉底塊 …… 1:3 (銭貨 1:1)

アミかけ  …… 攪乱・耕作土  …… 土塁構築土
 …… 鉄・錆土範囲  …… 灰土範囲
 …… 長石土範囲  …… 須恵器(断面)

その他 ● …… 遺物

目 次

本文目次

ごあいさつ

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	3
(1)発掘調査の方法と経過	3
(2)整理調査の方法と経過	3
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3節 遠台遺跡と八幡神社周辺古墳群における既往の調査	8
第3章 遠台遺跡第18地点の調査成果	11
第1節 調査区の地形と基本堆積土層	11
第2節 検出された遺構と遺物	11
(1)概要	11
(2)堀跡	13
(3)井戸跡	20
(4)遺構外出土遺物	20
第4章 八幡神社周辺古墳群第1地点の調査成果	24
第1節 調査区の地形と基本堆積土層	24
第2節 検出された遺構と遺物	24
(1)概要	24
(2)周溝	25
(3)遺構外出土遺物	28
第5章 総括	30
第1節 土地利用の変遷	30
第2節 八幡神社周辺古墳群第11号墳について	30
第3節 遠台遺跡の性格と課題	33
おわりに	36

写真図版

抄録

挿図目次

第1図	試掘の位置と調査区設定図	2	第12図	SE01	20
第2図	周辺の旧地形図	5	第13図	遺構外出土遺物	20
第3図	周辺の遺跡位置図	6	第14図	八幡神社周辺古墳群第1地点の全体図 と基本堆積土層	24
第4図	既往の調査と八幡神社周辺古墳群	9	第15図	SD01の調査区分と出土遺物	25
第5図	遠台遺跡第18地点の全体図と基本堆積 土層	12	第16図	SD01	26
第6図	SD01の調査区分と出土遺物	14	第17図	SD01出土遺物	27
第7図	I区SD01	15	第18図	遺構外出土遺物	28
第8図	II区SD01(1)	16	第19図	八幡神社周辺古墳群第11号墳 規模想定図	31
第9図	II区SD01(2)	17	第20図	遠台遺跡と周辺の地形	32
第10図	SD01出土遺物(1)	18			
第11図	SD01出土遺物(2)	19			

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧	7	第7表	遠台遺跡出土遺物集計表	23
第2表	遠台遺跡における既往の調査一覧	10	第8表	八幡神社周辺古墳群出土遺物観察表(1)	28
第3表	八幡神社周辺古墳群における既往の調 査及び古墳番号対応表	10	第9表	八幡神社周辺古墳群出土遺物観察表(2)	29
第4表	SD01ピット計測表	17	第10表	八幡神社周辺古墳群出土遺物集計表	29
第5表	遠台遺跡出土遺物観察表(1)	21			
第6表	遠台遺跡出土遺物観察表(2)	22			

写真図版目次

遠台遺跡第18地点第4次

- 図版1 遠台遺跡遠景 I区現況 II区現況 TP01基本堆積土層 TP02基本堆積土層
図版2 I区全景 同全景 SD01土層断面B 同土層断面C 同礫出土状況 同構築状況
図版3 II区全景 同全景 SD01東端部の構築状況と堆積土層
図版4 SD01土層断面F 同土層断面G 同土層断面H 同土層断面I II区SD01構築状況
同西端部ピット検出状況 同東端部ピット検出状況 SE01全景
図版5 SD01出土遺物(1)
図版6 SD01出土遺物(2)
図版7 SD01, 遺構外出土遺物

八幡神社周辺古墳群第1地点第3次

- 図版8 八幡神社周辺古墳群の調査区と第11号墳 調査区現況 調査区現況 TP01基本堆積土層
遺構確認状況
図版9 調査区全景 SD01土層断面 同土層断面A 同土層断面B 同土層断面C 同遺物出土状況
同遺物出土近景 同遺物出土近景
図版10 SD01出土遺物
図版11 SD01, 遺構外出土遺物

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

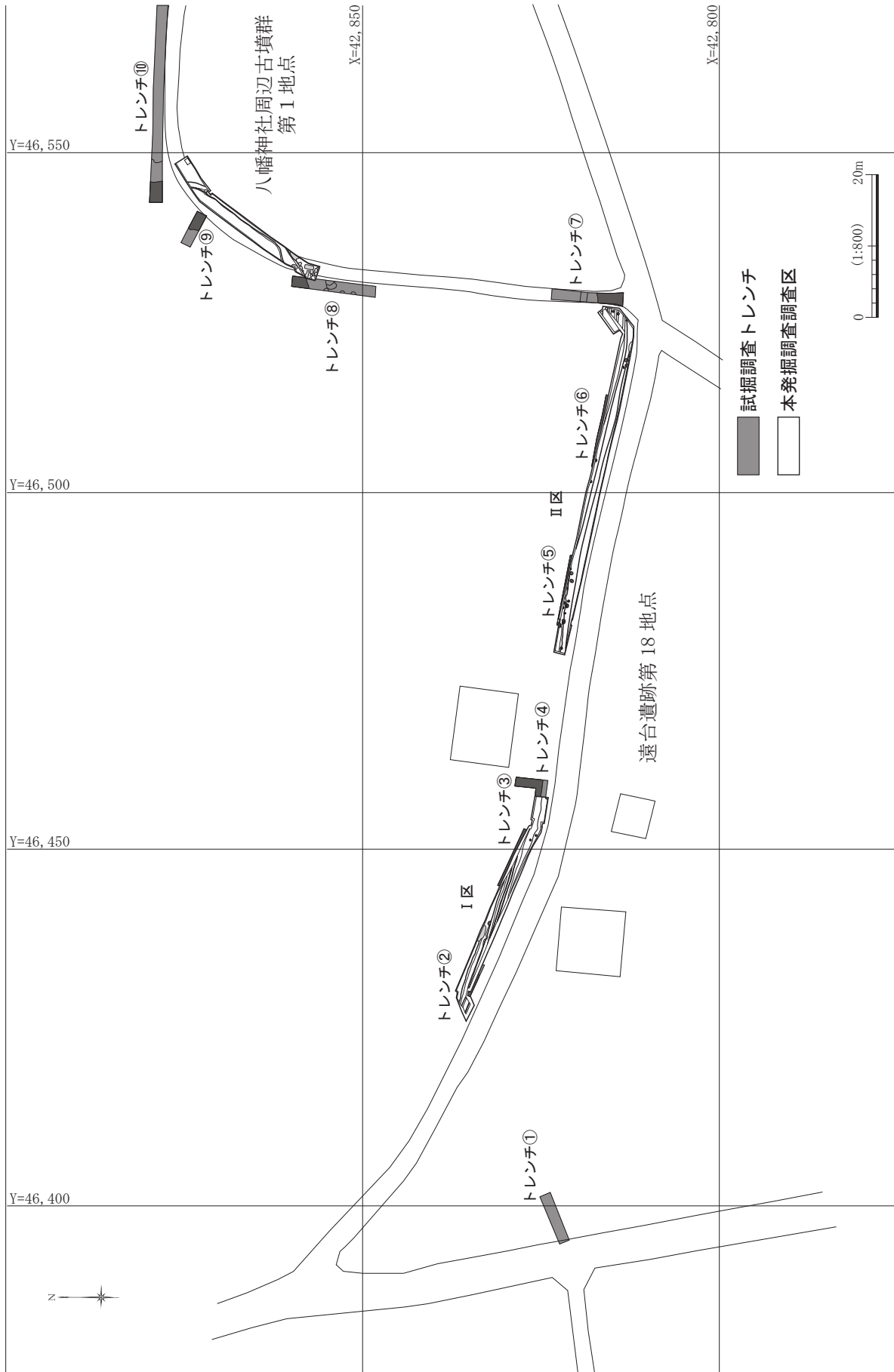
平成28年6月23日付けで、農業基盤整備を目的とした那珂川沿岸農業水利事業（以下「当該事業」という。）の実施に伴い、農林水産省関東農政局那珂川沿岸農業水利事業所長（以下「事業者」という。）から、水戸市教育委員会（以下「市教委」という。）教育長あて、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」が提出された。

当該事業の施工箇所は、周知の埋蔵文化財包蔵地「遠台遺跡」、「八幡神社周辺古墳群」の範囲内にその一部が該当していることから、市教委は水路埋設計画に基づき、工事の影響範囲内における埋蔵文化財の存否確認のため、平成28年7月（遠台遺跡第18地点第1次）、8月（遠台遺跡第18地点第2次、八幡神社周辺古墳群第1地点第1次）の2次にわたる試掘調査を実施した（第1図）。その結果、遠台遺跡においては、トレンチ②からトレンチ⑦にかけて大規模な中世の堀跡を検出した。各トレンチで得られた成果を総合すると、この堀跡は上端幅約5m程度、総延長にして100m以上の大規模なものであり、断面が菓研状を呈することなどから、当該地点に相応規模の中世遺跡が存在した可能性を示唆するという、注視すべき成果が得られた。八幡神社周辺古墳群においては、トレンチ⑧からトレンチ⑩において第11号墳の周溝を確認した。周溝の上端は、トレンチ⑨で内縁、トレンチ⑧、トレンチ⑩で外縁を検出し、周溝の上端幅は約6～6.5mを測るものと想定された。トレンチ内から埴輪片が出土したことから、当該古墳に埴輪の樹立があったことを確認すると共に、周溝の検出状況から、規模の推定には至らなかったものの、墳形は既往の報告どおり円墳である可能性が高いことを再確認した（第1図）。

以上のような試掘調査結果を受け、当該事業は深々度に水路を埋設するという工事計画上、直下に確認された埋蔵文化財への影響は不可避との想定から、市教委は、これらの埋蔵文化財に対する現状保存の可否について事業者と度重なる協議に臨んだ。しかしながら、試掘調査によって確認された埋蔵文化財を回避しての設計変更は難しく、確認された埋蔵文化財の現状保存は極めて困難であるとの結論に達した。このため市教委は、事業者から提出のあった文化財保護法第94条第1項に基づく通知について、埋蔵文化財への影響が想定される箇所については、茨城県埋蔵文化財発掘調査等取扱い基準-原則I「工事により埋蔵文化財が掘削され、破壊される場合」に基づき、次善の策として記録保存を目的とした本発掘調査を実施すべき旨の意見書を付して、平成28年11月1日付けにて、茨城県教育委員会（以下「県教委」という。）教育長あて進達した。

これに対し、県教委教育長からは平成28年11月16日付け文第2055号の通知があり、埋蔵文化財が影響を受ける部分については、工事着手前に発掘調査を実施すること、埋蔵文化財の分布する可能性が低い部分については、工事にあたって市教委の立会いを行うことなどの指示・勧告を受けた。その後、市教委と事業者との諸調整を経て、水戸市は、事業者と平成29年9月19日付けで「那珂川沿岸農業水利事業（二期）高根幹線水路工事に伴う発掘調査委託事業」の委託契約を締結したうえで、当該発掘調査における民間調査組織の支援導入のため、株式会社地域文化財研究所との発掘調査業務委託契約を締結し、埋蔵文化財への影響が想定される範囲から所与の条件によって調査の実施が困難な箇所を除いた面積259.6㎡を調査対象面積とし（第1図）、平成30年2月15日から同年4月3日の期間をもって本発掘調査を実施した。

（米川）



第1図 試掘の位置と調査区設定図

第2節 調査の方法と経過

(1) 発掘調査の方法と経過

調査は、現況写真の撮影後、遠台遺跡Ⅰ区、Ⅱ区、八幡神社周辺古墳群へと進め、各調査区毎に表土除去、遺構確認と掘り下げを繰り返し各段階を記録した。遠台遺跡は調査区全域が堀内のため安全を考慮し、調査区外の表土を一段掘り下げることに対処した。なお、終了した調査区毎に埋め戻しを行っている。

遺構の掘り下げは、土層観察用ベルトを設定しながら人力により行った。堀跡と周溝は完掘したが、井戸跡は、大半が調査区外のため1.8mの掘り下げで断念した。なお、攪乱はすべて除去している。

出土遺物は、現位置での記録を基本とする。ただ、微細な遺物は、土層観察用ベルトを用いて区を設定し、上・中・下の3層毎に台帳を作成しながら一括して取り上げた。区番号は遠台遺跡の堀跡において7区、八幡神社周辺古墳群の周溝で4区を設定した。詳細は第6図と第15図に記載している。

記録は公共座標（世界測地系）を基準に、1:20の縮尺で土層断面図及び平・断面図を作成した。堀跡及び周溝は20cm間隔の等高線を併記している。写真撮影は、白黒35mm、カラースライド35mm・6×7判の3台で記録し、デジタルカメラを補助に用いた。

発掘調査は、2月15日から開始し、遠台遺跡Ⅰ区より表土除去を行った。これと併行して安全対策を講じ調査環境を整備する。16日、表土除去終了。東部分の表土直下は鹿沼軽石層となり地形の改変が明らかになる。19日、精査及び遺構確認を開始。20日、堀跡の掘り下げに着手し、常滑製品や志野製品が出土する。21日、座標及び水準点を設置して実測に取りかかる。26日、Ⅱ区の表土除去開始。27日、Ⅰ区終了。3月2日、Ⅰ区埋め戻し。3日、Ⅱ区の表土除去を終え、八幡神社周辺古墳群へ移動する。5日、Ⅱ区の掘り下げに着手するが、西側は攪乱のため遺存状態は悪い。6日、表土除去終了。13日、Ⅱ区の掘り下げを終える。また、八幡神社周辺古墳群で周溝を確認し、翌14日から掘り下げる。15日、周溝内における埴輪の出土は少なく、しかも墳丘側に偏在していた。Ⅱ区の調査は主に実測となる。周溝の掘削は23日でほぼ完了する。26日からは記録が主体となり、29日の全体写真の撮影をもって調査を終了する。30日から埋め戻しを行い、4月3日に完了した。

(2) 整理調査の方法と経過

整理調査は、発掘調査によって得られた出土品及び記録を対象として行った。出土品は遺物収納箱3箱分（遠台遺跡2箱、八幡神社周辺古墳群1箱）で、作業は、遺構図面の修正、遺物水洗い・注記、接合、図面・写真の整理、遺物実測、トレース、編集、台帳の作成へと進めた。

遺物は細片に至るまで水洗いし、手書きにより可能な限り注記に努めた。注記にあたっては遺跡名・調査地点・遺構・出土位置・日時の順で行った。接合はセメダインCを用いて臨み、その後分類し、成果を出土遺物集計表に掲載した。実測は遺構に伴うものを基本に、掲載が必要と考えられる遺物を抽出している。写真撮影はデジタルカメラを使用し、実測遺物と、炉底塊・鉄滓の全量を撮影した。遺構図面の修正は第2原図を作成して行い、遺構写真は撮影内容・方向・日時などの必要事項を記載のうえ、台帳を作成してアルバムに収納している。台帳には図面・写真・遺物の3種類がある。遺物は報告書使用の番号で統一しており、報告書使用と未使用に分け内容を明記したうえで収納した。

整理調査は、終了書類の作成後着手し、図面修正及び遺物水洗いを行う。4月中旬には注記・接合へと進め、下旬には遺物を分類して、出土遺物集計表を作成した。5月に入ると実測に取りかかり、下旬に遺構・遺物をトレースし、6月に編集、調査資料を分析して報告書にまとめた。 (間宮)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

水戸市は、日本最大を誇る関東平野の北東部に位置する。市域の北部には、八溝山地を横切り、鷲子山塊と鶏足山塊とを南北に分ち、西から東へ流れる那珂川とその支流によって形成された沖積低地が広がり、これに沿うように東茨城台地が太平洋に向かって突き出している。遠台遺跡・八幡神社周辺古墳群は、水戸市域の南西部である内原地区に所在する。この地区は、通称友部丘陵と呼ばれる北側から延びる丘陵と東茨城台地の境目にあたる地域である。友部丘陵は、鶏足山塊の縁辺にあたる標高70～100m程の起伏に富んだ山林地帯であるが、丘陵先端部では緩やかな傾斜となって集落や畑地が広がる。この丘陵は、桜川や涸沼前川、及びそれらに注ぐ小河川や沢によって開析され、大小の侵食谷が入ることにより舌状丘陵が形成されている。

八幡神社周辺古墳群は、桜川左岸の標高58～66m程の舌状丘陵の先端に、遠台遺跡は、その範囲を八幡神社周辺古墳群と重複しつつ、標高42～65m程の丘陵部一帯に展開している（第2図）。

第2節 歴史的環境

遠台遺跡・八幡神社周辺古墳群が立地する友部丘陵は、支丘毎に大小の古墳群が多く形成されており、茨城県下においても有数の古墳集中地域である。本節では、当該地域において活発な造墓活動が行われた古墳時代を中心に、歴史的環境を概観する（第3図・第1表）。

内原地区に存在する友部丘陵は、桜川や古矢川などに開析され四つの支丘が形成されている。ここではそれぞれ、東から田島支丘、牛伏支丘、有賀・中原支丘、杉崎支丘と呼称することとする。

まず田島支丘であるが、この支丘には田島古墳群、三本松古墳群が立地する。田島古墳群は、丘陵の平坦面や斜面に立地し前方後円墳3基、円墳40基を擁する古墳群である。丘陵地形と分布状況によって大きく東・中央・西群に細分される。東群は丘陵斜面の尾根筋に沿って、前方後円墳を含む当該古墳群内においても比較的規模の大きな円墳によって構成される。中央群には約20基の円墳が集中する。東群に接する丘陵尾根部の平坦面には比較的規模の大きな古墳が築造され、中央から西側にかけて分布する古墳は径約10m前後の比較的小型のものが多い。三本松古墳群は、田島古墳群の南に立地し、現存する古墳は4基であるが、『新編常陸国誌』にはこの地域に多くの古墳が存在し、近隣の農夫が石室石材を土蔵の材に用いるとの記述がみられ（宮崎報恩会1969年）、横穴式石室を有する多数の古墳が存在したことが推測される。

牛伏支丘には、一戦塚古墳、三野輪古墳群、牛伏古墳群、舟塚古墳群、二所神社古墳が存在する。友部丘陵において最大級の墳丘規模を誇るのが、二所神社古墳と舟塚古墳群の盟主墳たる舟塚古墳であり、当該支丘には、両古墳が立地する。二所神社古墳は、全長80m、後円部径46m、同高さ7.5m、現存前方部幅30m、同高さ6.5mを測る前方後円墳であり、前方部先端が削平を受けていることを考慮すれば、全長は85m程に復元され、6世紀代の築造と推定されている（内原町史編さん委員会1996）。舟塚古墳は、全長約80m、後円部径約40mを測る前方後円墳であり、二段築成で括れ部には造り出しの痕跡が認められる。前方部西側の一部が道路建設によって削平されているが、形状や墳丘から埴輪片が採集されることから、6世紀前半頃に推定されている（内原町史編さん委員会1996前掲）。一戦塚古墳は、支丘の平坦面に立地し、全長15.8mの前方後円墳とされるが、円丘部とその



第2図 周辺の旧地形図 (1:25,000 『明治前期 関東平野地誌図集成』 明治13年～19年)

南側に敷設する墓地を前方部に見立てたものとされ、前方後円墳か否かは今後の調査に期するところが大きい。三野輪古墳群は一戦塚古墳の東150mの谷底平野に接する斜面に築造され、円墳2基で構成される。何れも牛伏集落の採石場として利用されていたために、遺存状況は必ずしも良いとはいえない。現状で第2号墳には墳丘は確認されず、古墳とした場合には地山削り出しにて墳丘を構築した可能性が考えられる。牛伏古墳群は、前方後円墳6基、帆立貝式古墳1基、円墳9基からなる古墳群である。群内における古墳の分布は、狭い範囲に前方後円墳4基と円墳1基が集中する東群、前方後



第3図 周辺の遺跡位置図

円墳，帆立貝式古墳，円墳が混在する西群に分けることができる。東群に属する前方後円墳である第4号墳は，平成7年に「くれふしの里古墳公園」整備に伴い発掘調査が行われた。その結果，大きく攪乱を受けてはいたが，埋葬施設が花崗岩を用いた横穴式石室であることを明らかにし，形象埴輪や円筒埴輪，大刀，鉄鍬，鎌，雲珠をはじめ，6世紀後半に帰属する須恵器，土師器などの遺物が得られた。舟塚古墳群は，前述のように当該丘陵最大級の前方後円墳を擁する古墳群であり，他に円墳2基が確認され，湮滅したものの帆立貝式古墳1基も存在した。また，牛伏支丘の南，水田地帯を挟んだ台地上には論田塚古墳群が立地しており，かつては北に八幡塚，南に狐塚の2基の円墳によって構成されていたが，現在は共に湮滅している。しかしながら，八幡塚からは，鏡と共に水戸市指定文化財である石枕が出土しており，狐塚からは大刀，鉄鍬の出土が伝えられている。

有賀・中原支丘には，有賀台古墳群，遠台古墳，八幡神社周辺古墳群，鷹ノ巣古墳，鷹ノ巣南古墳，

第1表 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	遺物	備考
305-002	遠台遺跡	包蔵地	縄文土器（中期・晩期）、磨製石斧、弥生土器（後期）、埴輪、土師器（古墳前期・奈良・平安）、須恵器（古墳後期・奈良・平安）、陶器、中世土器	
305-003	杉崎遺跡	包蔵地	縄文土器（中期）、子持勾玉（古墳）、土師器（古墳前期・後期・平安）、須恵器（奈良・平安）	
305-004	論田塚古墳群	古墳群	石枕・直刀・鏡	(円2)
305-005	二所神社古墳	古墳		前方後円
305-006	舟塚古墳群	古墳群	埴輪	前方後円1, 円2, (帆立貝1)
305-007	田島古墳群	古墳群		前方後円3, 円40
305-008	三本松古墳群	古墳群		円4 (5)
305-009	牛伏古墳群	古墳群	鉄鏃, 大刀, 鎌, 絞具, 不明鉄製品, 銅製品, 雲珠, 円筒埴輪, 朝顔形埴輪, 形象埴輪 (人物, 馬)	前方後円6, 帆立貝1, 円9
305-010	遠台古墳	古墳		円墳
305-011	八幡神社周辺古墳群	古墳群	直刀, 刀子, 棒状鉄製品, 管玉, 小玉, 埴輪	前方後円 (1), 円10 (2)
305-012	杉崎古墳群	古墳群	石枕, 立花, 埴輪	前方後円5, 円28
305-028	一戦塚古墳	古墳		前方後円?
305-029	有賀台古墳群	古墳群		円6, 方2?
305-032	コロニー古墳群	古墳群	刀子, 絞具, 円筒埴輪, 朝顔形埴輪, 形象埴輪 (人物, 馬, 鳥, 家)	前方後円4, 円11
305-034	三軒屋古墳群	古墳群		円8
305-048	鷹ノ巣南古墳	古墳		前方後円
305-049	杉崎権現古墳	古墳		円
305-051	鷹ノ巣古墳	古墳		前方後円
305-055	田島城跡	城館跡		
305-056	大足城跡	城館跡		
305-057	塚原城跡	城館跡		
305-058	中原館跡	城館跡		
305-061	三湯館跡	城館跡	土塁, 堀	
305-063	三野輪古墳群	古墳群		円2
305-065	有賀金山遺跡	生産遺跡		
305-066	榎巷遺跡	包蔵地	弥生土器（後期）、土師器（古墳中期・後期、平安）、須恵器（平安）	
305-069	一戦塚遺跡	包蔵地	縄文土器（中期）、弥生土器（後期）、石製模造品（剣）、土師器（古墳前期・後期、奈良・平安）、須恵器（奈良・平安）、陶器	
305-081	大平古墳群	古墳群	埴輪	前方後円1, 円4

(内原町史編さん委員会 1994 を基に作成)

大平古墳群, コロニー古墳群, 杉崎権現古墳が立地している。有賀台古墳群内には、丘陵の尾根筋に沿って6基の円墳と2基の方墳が分布する。遠台古墳は、かつて八幡神社周辺古墳群を構成する円墳の1基と数えられていたが、その立地から現在は単独の古墳として認識されている。規模は直径32～35mを測り、内原地区最大規模の円墳である。鷹ノ巣古墳は、全長35m、高さ3mを測る前方後円墳とされるが、現在では周囲を削平され墳形は不明瞭である。鷹ノ巣南古墳は、全長40mを測る西面する前方後円墳である。大平古墳群は、コロニー古墳群の支群とされていたが、現在は前方後円墳1基、円墳4基を擁する別個の古墳群として認識されている。コロニー古墳群内には、茨城県立あすなろの郷（旧茨城県立コロニーあすなろ）の敷地内を中心に、前方後円墳4基、円墳11基が分布する。茨城県立コロニーあすなろの建設に伴い前方後円墳2基、円墳4基の発掘調査が行われた。中でも、前方後円墳である第15号墳からは、水鳥や人物をはじめ豊富な形象埴輪が出土すると共に、埋葬施設からは刀子、帯金具が出土した。杉崎権現古墳は、直径9.5m、高さ約1.3mの円墳である。

杉崎支丘には、杉崎古墳群、三軒屋古墳群が立地する。杉崎古墳群内には、前方後円墳5基、円墳28基が分布する。第40号墳では発掘調査が行われ、木棺直葬の埋葬施設から市指定文化財の立花受孔を有する石枕と立花が出土し、5世紀後半～6世紀初頭の年代が考えられている。三軒屋古墳群は、

第2章 遺跡の位置と環境

水戸市と笠間市の境界に位置し、笠間市では柳沢古墳群と呼称され、8基の円墳で構成される。

以上が友部丘陵上に立地する古墳・古墳群の概要である。多くの古墳・古墳群が存在することから、各古墳・古墳群を概観するに留めざるを得ないが、少なくとも、往時の造墓活動は、当該地域に拠点を置いた豪族の各々が丘陵の支丘を墓域として占地し、活発に行われていたことがうかがわれる。

さて、上記のような古墳群が密集する地域にあって、友部丘陵及びその周辺における古墳時代の集落は、代表的なものとして榎巷遺跡、一戦塚遺跡、遠台遺跡、杉崎遺跡などがある。これらの集落跡は、何れも同一支丘上の古墳群と隣接もしくは範囲を重複して存在しており、それぞれの丘陵を地盤とし、古墳を築造して行った集団であると考えられる。

内原地区における集落遺跡の調査は、小規模な開発に伴う零細な試掘調査が多く、奈良・平安時代の遺跡についても、分布調査により得られた情報が中心となり、その実態が十全に把握できているとは必ずしもいえない状況にある。しかしながら、奈良・平安時代から新たに形成されたと考えられる集落が少なくない中で、前掲のような古墳時代に友部丘陵における造墓活動を支えた集落は、奈良・平安時代を迎えても途絶えることなく営まれていることは注視すべきであろう。

中・近世になると、当地域は江戸氏の管轄下に置かれ、友部丘陵には多くの城館が築かれるようになる。主要なものとしては、田島支丘に立地し、加倉井豊後守が封ぜられたとされる田島城跡、牛伏支丘に立地し、外岡伯耆守の城となった大足城跡、有賀・中原支丘に立地する国井氏の館とされる中原館跡、杉崎支丘には塙主水正の居館であったとされる三湯館跡がある。

このように、当該地域では、支丘という地形によって分かれた状況下で、複数の勢力・集団が支丘を拠点とし、活発な土地利用を行ったことがうかがわれる。この地で連綿と人々の生活が続く中、土地利用がいかに変遷したかを検討するうえで極めて興味深い地形・地域であるといえよう。

第3節 遠台遺跡と八幡神社周辺古墳群における既往の調査

遠台遺跡は、平成3～4年にかけて内原町教育委員会が実施した分布調査の際に、縄文時代から室町時代にかけての人々の営みが連綿と続いた地域であることが明らかとなっている（内原町史編さん委員会1994）。これまでに水戸市教育委員会が実施した試掘調査は17地点に及ぶ（第4図・第2表）。大部分は個人住宅建築など小規模開発に伴う零細な試掘調査であるが、この内第7地点、第11地点から第14地点の計5地点において、個人住宅建築に伴う記録保存を目的とした本発掘調査を実施した。

これらの本発掘調査では、いずれの地点でも主として古墳時代から奈良・平安時代にかけての竪穴建物跡を検出し、第14地点では、古墳時代前期の竪穴建物跡に加え、奈良・平安時代に帰属する、南北方向に走る上端幅3mを測る大規模な溝跡を検出している。個人住宅建築に伴う、面積にして100㎡前後の小規模な調査ながら、個々の調査地点における成果を概観して特筆すべきは、第13地点にて検出した古墳時代前期に帰属する竪穴建物跡である。当該遺構の南東角では、床面直上に崩れたように重なって、土師器台付甕を中心とする遺物群が密集するという、特徴的な出土状況を呈している。

主に奈良・平安時代の遺構群を検出した上記の地点とは対照的に、中・近世に帰属すると考えられる遺構群を確認したのが第7地点である。掘立柱建物跡6棟を検出し、これら建物跡群の柱穴はいずれも規模が小さく、その配置や棟方向には規則性が見出せないものの、その有り様から中・近世の村落内に存在した建物群であった可能性が考えられる。

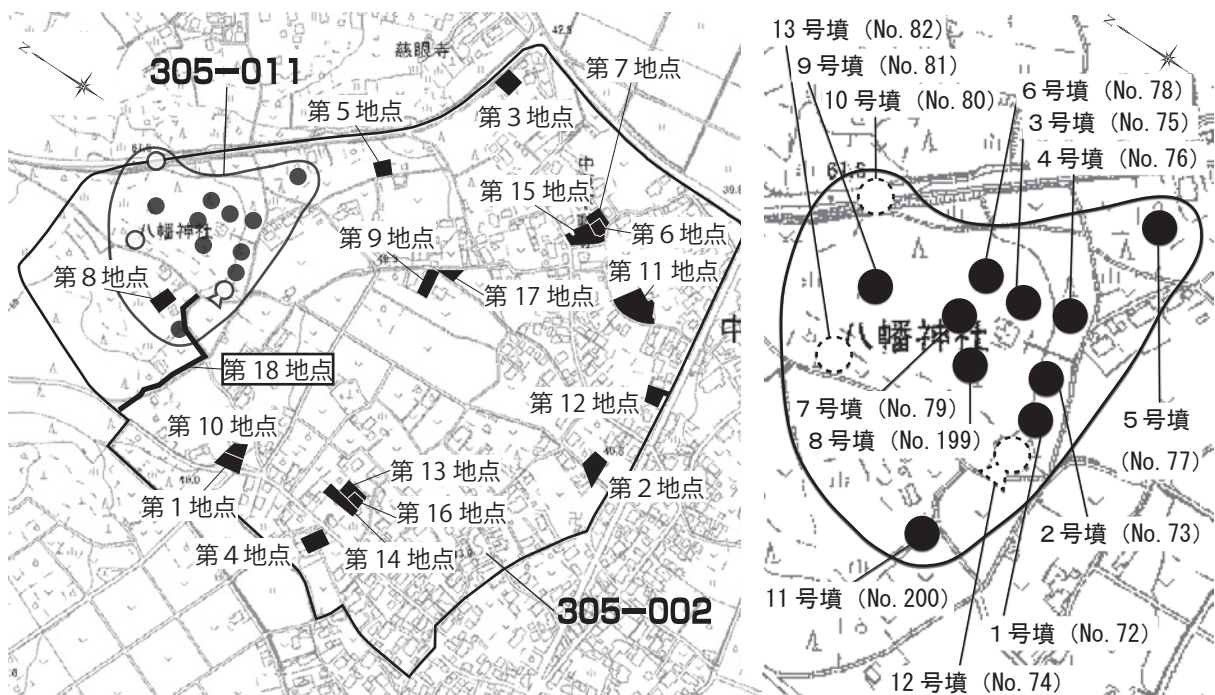
八幡神社周辺古墳群については、昭和47年作成、昭和57年改訂の『内原町古墳一覧表』（内原町

教育委員会 1982) や『内原町の遺跡』(内原町史編さん委員会 1994 前掲)をはじめとして、分布調査及びその報告が行われている。しかしながら、当古墳群における古墳番号については、分布調査や発掘調査のたびに錯誤がみられ、各古墳と古墳番号の対照に一貫性がみられない状況にあった。よって本報告書においては、改めて、『内原町古墳一覧表』と水戸市内遺跡台帳をベースとして古墳番号の整理を行った(第4図・第3表)。なお、内原地区における古墳は、『内原町古墳一覧表』の作成の際に全て通し番号が振られているため、第4図中の括弧内に旧番号として示した。以後、当古墳群は、前方後円墳1基、円墳12基からなる古墳群(内前方後円墳1基、円墳2基は湮滅)であるとし、調査地点を地点名で管理すると共に、地点名・古墳番号については、本報告書を基本とすることとしたい。

さて、当古墳群における既往の調査成果であるが、第10号墳(No. 80, 八幡神社周辺古墳群第2地点)、第13号墳(No. 82, 八幡神社周辺古墳群第3地点)で発掘調査が実施されている。第10号墳は、平成8年に旧内原町道2-52号線(現水戸市道7-0052号線)建設工事に伴う発掘調査で、墳丘は僅か10~30cm程しか残存していなかったものの、短軸16m、長軸19mの楕円形に周溝を巡らせた円墳であることが明らかになった(内原町教育委員会他 1997)。墳丘の中心から逸れて検出された埋葬施設は、木棺直葬と推測されており、棺内からは直刀3振、鉄鏃9点が出土し、築造年代は6世紀後半~7世紀前半と判断された(内原町教育委員会他 1999)。第13号墳は、宅地造成に伴い発掘調査され、直径約26m、高さ2.5m以上の円墳であると確認された。埋葬施設は検出されなかったが、副葬されていた鉄製品(直刀、刀子、棒状鉄製品)、碧玉・滑石製管玉、ガラス小玉の出土状況から木棺直葬と推定されている。築造年代は、報告書中にて「正式に調査された当町内(筆者注:現水戸市内原地区)の古墳としては最も古い時期のもの」と言及されている(内原町教育委員会他 1985)。

また、第12号墳は、発掘は行われていないものの、昭和55年に墓地改修により破壊されてしまったが、埋葬施設は横穴式石室で、埴輪を有さない前方後円墳とされる(内原町教育委員会他 1985)。

これら3基の古墳が開発により湮滅したため、現在では10基の円墳が姿を留めている。(米川)



第4図 既往の調査と八幡神社周辺古墳群

第2章 遺跡の位置と環境

第2表 遠台遺跡における既往の調査一覧

地点名	回数	種別	調査年月日	調査箇所	調査原因	遺構	遺物	備考
第1地点	1	試掘	平成18年10月16日	杉崎町2202-2	個人住宅建築	—	—	水戸市教育委員会2009
第2地点	1	試掘	平成19年7月30日	杉崎町2102	個人住宅建築	—	—	水戸市教育委員会2010
第3地点	1	試掘	平成20年3月17日	中原町737-8	個人住宅建築	—	—	水戸市教育委員会2010
第4地点	1	試掘	平成21年4月10日	杉崎町721-3	個人住宅建築	—	○	
第5地点	1	試掘	平成22年7月21日	中原町872-5, -6	個人住宅建築	—	—	
第6地点	1	試掘	平成23年5月31日	中原町760-5, 761-2	個人住宅建築	—	—	
第7地点	1	試掘	平成23年7月26日	中原町760-4	個人住宅建築	○	○	
	2	本調査	平成23年12月20日 ～平成24年1月27日			○	○	
第8地点	1	試掘	平成23年10月27日	中原町1022-2	個人住宅建築	—	—	
第9地点	1	試掘	平成24年6月21日	杉崎町2140-2	個人住宅建築	—	—	
第10地点	1	試掘	平成24年12月4日	杉崎町2202-1	個人住宅建築	—	—	
第11地点	1	試掘	平成25年8月6日	中原町783	個人住宅建築	○	○	
	2	本調査	平成25年9月3日 ～10月29日			○	○	
第12地点	1	試掘	平成26年2月27日	中原町807-8	個人住宅建築	○	○	
	2	本調査	平成26年5月14日 ～6月6日			○	○	
第13地点	1	試掘	平成26年7月24日	杉崎町368-3	個人住宅建築	○	○	
	2	本調査	平成26年10月8日 ～11月25日			○	○	
第14地点	1	試掘	平成26年7月31日	杉崎町367-1	個人住宅建築	○	○	
	2	本調査	平成26年10月9日 ～11月29日			○	○	
第15地点	1	試掘	平成27年4月1日	中原町761-1, 760-3, 760-1の一部	個人住宅建築	—	—	
第16地点	1	試掘	平成27年12月18日	杉崎町368-1	個人住宅建築	—	—	
第17地点	1	試掘	平成28年5月6日	中原町845-1	個人住宅建築	—	—	
第18地点	1	試掘	平成28年7月22日	杉崎町2267付近～中原町 1020付近	那珂川沿岸農 業水利事業	○	○	本報告書
	2	試掘	平成28年8月23日			○	○	
	3	立会	平成30年1月16日			—	—	
	4	本調査	平成30年2月15日 ～4月3日			○	○	

第3表 八幡神社周辺古墳群における既往の調査及び古墳番号対応表

古墳番号			墳形	直径 (m)	地点名	回数	種別	調査年月日	調査原因	備考
新No.	旧No.	旧内原町 通しNo.								
第1号墳	第1号墳	72号墳	円	18	—	—	—	—	—	
第2号墳	第2号墳	73号墳	円	24	—	—	—	—	—	
第3号墳	第4号墳	75号墳	円	24	—	—	—	—	—	
第4号墳	第5号墳	76号墳	円	20	—	—	—	—	—	
第5号墳	第6号墳	77号墳	円	22	—	—	—	—	—	
第6号墳	第7号墳	78号墳	円	20	—	—	—	—	—	
第7号墳	第8号墳	79号墳	円	32	—	—	—	—	—	
第8号墳	第9号墳	199号墳	円	15	—	—	—	—	—	
第9号墳	第11号墳	81号墳	円	10	—	—	—	—	—	
第10号墳	第10号墳	80号墳	円	30	第2地点	1	本調査	平成8年7月27日 ～8月9日	町道敷設	内原町教育委員会1997 *当該報告書では第11号 墳(内原81号墳)と誤記
第11号墳	第15号墳	200号墳	円	17.6	第1地点	1	試掘	平成28年8月23日	那珂川沿岸 農業水利事 業	本報告書
						2	立会	平成30年1月31日		
						3	本調査	平成30年2月15日 ～4月3日		
第12号墳	第3号墳	74号墳	前方 後円	全長 24	—	—	—	—	—	墓地造成のため湮滅
第13号墳	12号墳	82号墳	円	26	第3地点	1	本調査	昭和59年6月28日 ～7月7日	個人住宅 建築	内原町教育委員会1985

※古墳の旧No., 旧内原町通しNo., 墳形, 直径は内原町教育委員会1982による。

第3章 遠台遺跡第18地点の調査成果

第1節 調査区の地形と基本堆積土層

調査区は、遠台遺跡西端部の南と西へ向け傾斜がはじまる台地縁辺部において二カ所を設定し、西側をⅠ区、東側をⅡ区と命名した（第5図）。二カ所共南に位置する道路と隣接しており、地形は道路を境に南へ向け高度を減じて行く。調査区は概ね平坦な地形であるが、Ⅰ区に関しては西の開析谷に近く、僅かながら南西への傾斜が認められる。調査前の現況は、Ⅰ区は樹木が植えられた休耕地となっており、Ⅱ区は畑地として使用されていた。標高はⅠ区 58.0 m、Ⅱ区 58.2 mである。

本調査では、Ⅰ区の西部（TP01）とⅡ区の西部（TP02）の二カ所において、基本堆積土層を観察・記録した。基本的には同じ堆積を示しているが、耕地としての使用頻度などその後の利用状況と、立地により相違する。

①・①'・②層は暗褐色の表土層である。Ⅰ区では根の混入が著しく①'層とした。Ⅱ区の①・②層は道路際の土手になる。Ⅱ区においてはその下に耕作土の③・④層が確認できるが、Ⅰ区では削平を受けているため、①'層を除去すると⑥層のにぶい黄褐色土層になる。Ⅱ区ではこの間に白色粒・黒色粒を中量、赤褐色粒を微量に含んだ黄褐色土層が確認される。ハードローム層は、下部になる程粘性や締まりを増し、鹿沼軽石粒を多量に含んだ⑦層のにぶい黄褐色土層を経て、⑧・⑨層の鹿沼軽石層になる。鹿沼軽石層は二層に分かれ、上層では粒径が細かく下層は粗くなり、⑩層の粘土層に至る。ただTP01において鹿沼軽石層は分層はできず、さらに層厚も厚かった。一方、TP02では、⑧・⑨層の鹿沼軽石層を⑩層が分断しており不自然である。この状況は水戸市の河和田城跡第26地点や、常陸大宮市南部の中崎遺跡において確認されており、この時期に地質に影響を及ぼす何らかの変化があったのかもしれない。その要因については、今後への課題である。

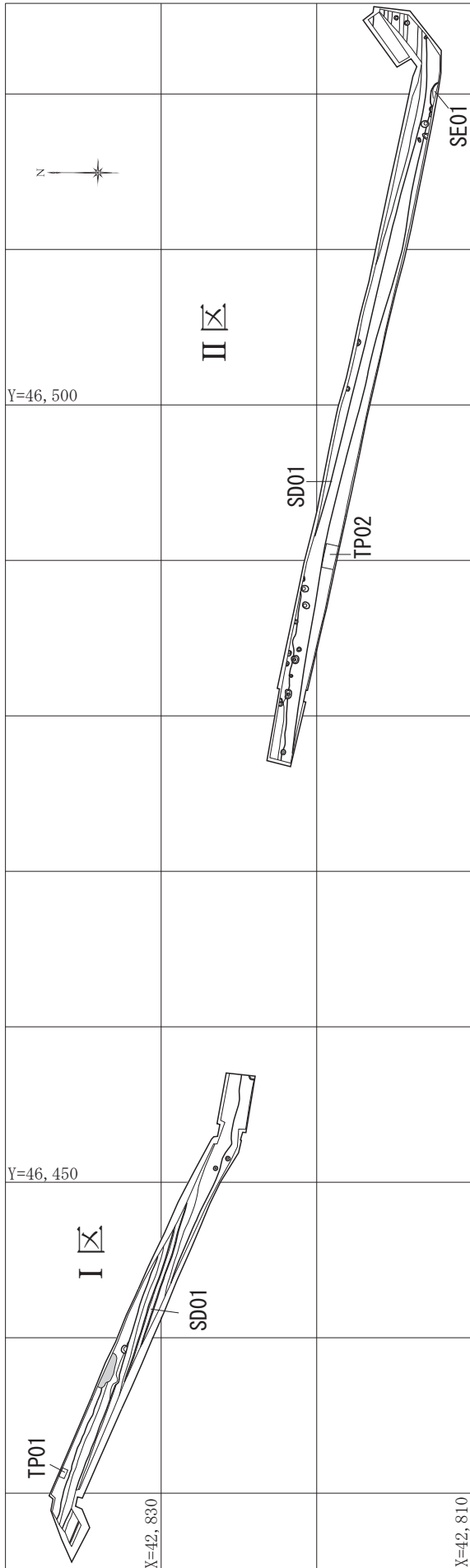
第2節 検出された遺構と遺物

(1) 概要

遠台遺跡は踏査によって、縄文・弥生・古墳・奈良・平安時代・中世の遺物が採取され、当該期の包蔵地とされてきた。本調査は遺跡範囲の西端部に実施されたもので、遠台遺跡におけるまとまった面積を対象としたはじめての考古学調査になっている。

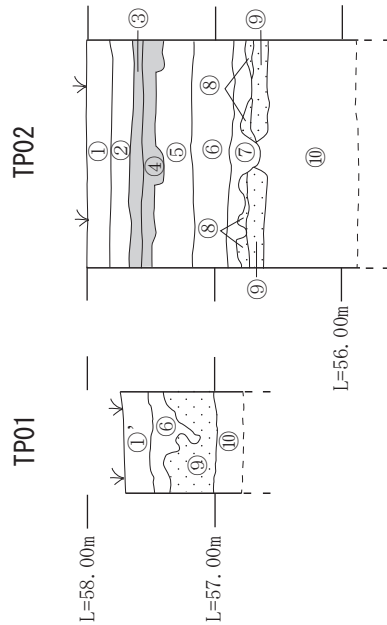
出土遺物は、第7表において種別・出土位置毎に数量を提示したが、総数は166点を数える。収納箱2箱分である。大半が破片資料であり、残存率1/2以上の個体は、土師質土器皿と寛永通寶、時期不明の石・鉄製品の合計5点のみであった。本調査では、縄文時代後期初頭の堀之内1式土器を最古に、古墳時代の土師器、奈良・平安時代の土師器、須恵器、瓦、近世の陶磁器・土器・銭貨、時期不明の鉄製品や炉底塊・鉄滓が少量出土しているが、主体となるのは13～14世紀の常滑製品と、16世紀末～17世紀前半の瀬戸・美濃製品や土師質土器資料であった。

検出された遺構は、近世初頭の空堀1条と近世の井戸跡1基であり、空堀は城館跡に伴う遺構と判断した。とくに、堀跡は調査区の全域にわたって検出されている。また、時期の特定はできなかったものの、炉底塊あるいは鉄滓とみられる資料が9点認められたことから、城館には製鉄遺構を伴っていた可能性がある。このため炉底塊や鉄滓、時期不明の常滑製品、鉄製品については堀跡の項目で報告し、さらに実測対象外とした炉底塊あるいは鉄滓も、全量写真図版において提示した。



基本堆積土層

- ① 暗褐色土 10YR3/4 締り・粘性弱。
- ② 暗褐色土 10YR3/4 根混入著しい。締り・粘性弱。
- ③ 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒中量含む。締り・粘性弱。
- ④ 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒・ロームブロックφ1~3cm中量含む。耕作土。
- ⑤ 黄褐色土 10YR5/8 白色粒・黒色粒中量。赤褐色粒微量含む。締り強、粘性有。ハードローム層。
- ⑥ にぶい黄褐色土 10YR5/4 黄色粒・白色粒・黒色粒中量含む。締り強、粘性有。ハードローム層。
- ⑦ にぶい黄褐色土 10YR5/4 鹿沼軽石粒多量含む。白色粒・黒色粒少量含む。締り強、粘性有。
- ⑧ 黄褐色土 10YR7/8 粒径の細い鹿沼軽石粒密に含み、白色粒・黒色粒中量含む。締り強、粘性有。鹿沼軽石層。
- ⑨ 黄褐色土 10YR7/8 粒径の粗い鹿沼軽石粒密に含み、白色粒・黒色粒中量含む。締り強、粘性有。鹿沼軽石層。
- ⑩ 暗褐色土 10YR3/3 白色粒少量含む。締り・粘性強。粘土層。



第5図 遠台遺跡第18地点の全体図と基本堆積土層

(2) 堀跡

SD01 (第6・7・8・9・10・11図, 第4・5・6・7表, 図版2・3・4・5・6・7)

本遺構は、現道の北側に直線状に構築されており、さらに東西の調査区外へ延びる。発掘された全長はⅠ区34m、Ⅱ区49mの合計83mで、調査区の全域で検出された。Ⅰ区とⅡ区の間となる20m区間は未調査であるもののⅠ区とⅡ区の状況から連続していると判断される。Ⅰ区内の東部分では北側、西部分では南側、Ⅱ区内では北側に遺構は寄っていた。走行方向は、概ねN—78°—Wである。断面形は葉研状の空堀で、Ⅰ区の東部分では南側上端、西部分では北側上端が確認され、さらにⅡ区の東端部の状況から判断して、上端幅は推定5m、下端幅0.13～0.30m、土層断面にみる深度は2.20m前後を測る。現地表からは東端部2.95m、西端部2.33mである。Ⅱ区の東端部における水平を基準にした壁の立ち上がりは、南壁が44°、北壁が52°で、北壁がやや急になる。また、Ⅱ区の東西両端部を中心にピットが掘り込まれており、調査範囲が僅かなため断定はできないものの、逆茂木あるいは柵が設けられていた可能性は高い。その規模については計測表に集計したが、長径は20～60cmで20cm台、深さは15～59cmで40cm台が最も多い。このピットは直線状に配置されているようであるが、芯々での柱間寸法はP8～P9間が1.20m、P21～P22間が0.80mとまちまちで、規格性には乏しい。堀跡の埋没状況は、底面を除くと全体に粗い土質であり人為的堆積を示す。

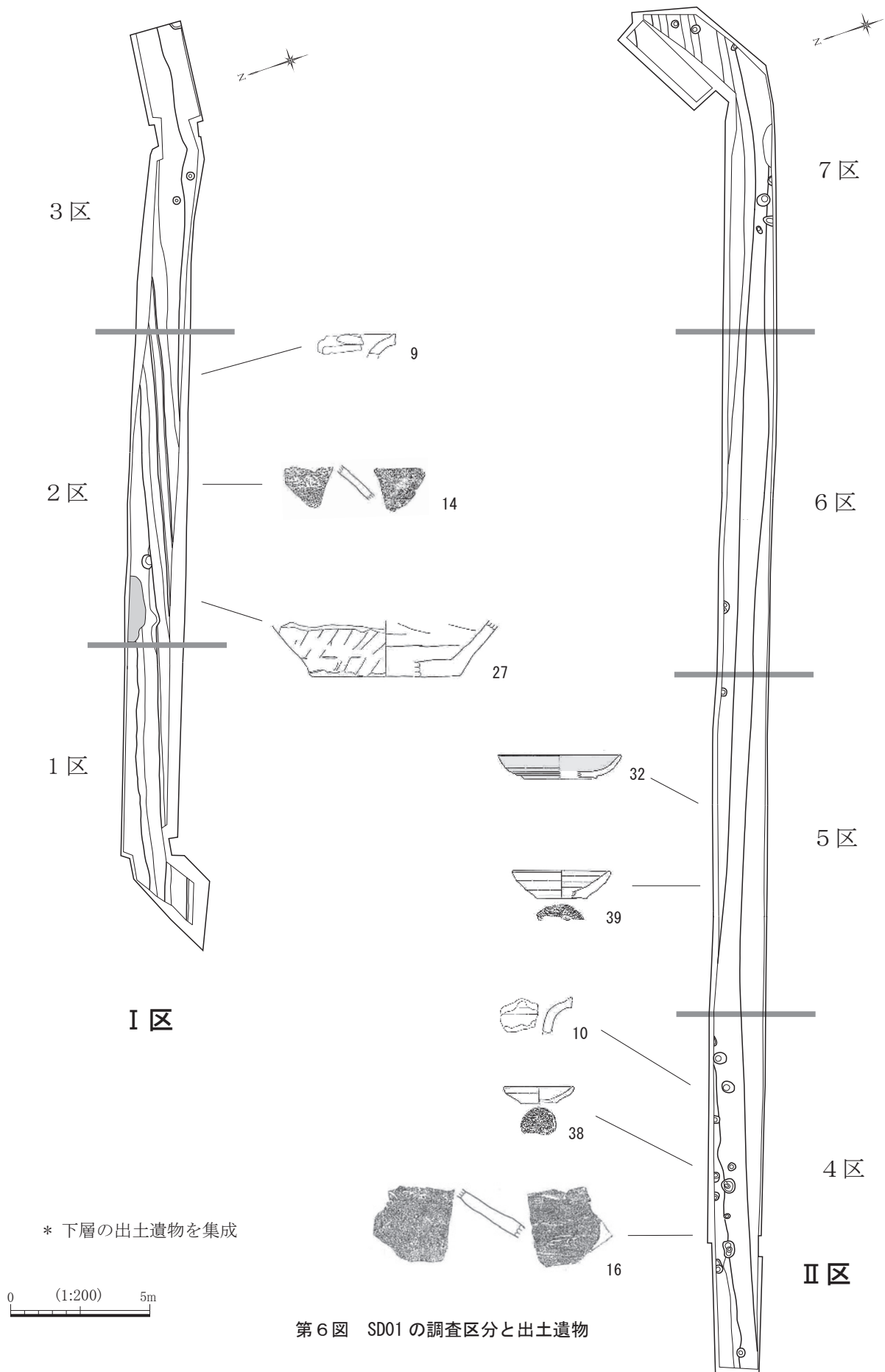
Ⅰ区とⅡ区の堀の覆土には違いが認められるので土層説明はそれぞれに行ったが、Ⅰ区の底面には褐色土が堆積し、その上に暗褐色土と黒褐色土が覆う。10・11層は土塁の構築土で、Ⅰ区の東西両端部では早い段階で埋め戻されているが、中央では3層のさらに上で確認される。一方、Ⅱ区の底面には粘質の褐色土あるいは灰黄褐色土、次いで暗褐色土と黒褐色土が堆積し、2・3層が土塁構築土となる。Ⅱ区の状況は埋め戻しの最終段階で土塁が崩されたと判断される。また、Ⅰ区の2区とⅡ区の7区では中層の土塁構築土の下から、拳～人頭大の砂岩を主体とする自然礫が投げ込まれていた。

遺物の詳細については出土遺物集計表に記載したが、縄文・古墳・奈良・平安時代、中・近世に比定される166点が得られた。この中で中心になるのは13～14世紀の常滑製品と、16世紀末～17世紀前半の瀬戸・美濃製品や土師質土器であり、両者共に本項において報告した。その他については遺構外出土遺物で扱っている。13～17世紀前半の遺物は、7区が最も多く47点で、2区15点、3区11点へと続く、そのほとんどは上層からの出土で占められ、第6図のとおり下層の遺物は少ない。また、時期不明ながら9点の炉底塊あるいは鉄滓とみられる遺物が出土している。製錬段階を示す資料と認識され、着磁性が極めて弱いため中・近世の遺物である可能性が高くここに掲載した。

時期は、下層及び中層から出土した遺物と、堀跡の形態などから16世紀末～17世紀前半とし、短時間で機能を停止したと判断される。

Ⅰ区 SD01 土層説明 (第7図対応)

① 暗褐色土 10YR3/4	根混入著しい。締り・粘性弱。	9 黒褐色土 10YR3/2	ローム粒・鹿沼軽石粒多量含む。全体に粗い。粘性弱。
② 暗褐色土 10YR3/3	ローム粒多量含む。締り有、粘性弱。	10 褐色土 10YR4/6	ローム粒・ロームブロックφ1～2cm多量含む。全体に粗い。粘性弱。土塁構築土。
1 暗褐色土 10YR3/3	ローム粒多量含む。黒色土混入する。締り・粘性弱。	11 褐色土 10YR4/4	ローム粒・ロームブロックφ1～2cm多量含む。全体に粗い。粘性弱。土塁構築土。
2 黒褐色土 10YR3/2	ローム粒多量含む。締り有、粘性弱。	12 暗褐色土 10YR3/4	ローム粒・ロームブロックφ1～2cm密に含む。締り・粘性有。
3 暗褐色土 10YR3/3	ローム粒多量含む。鹿沼軽石φ1～5cm中量含む。締り有、粘性弱。	13 褐色土 10YR4/6	ローム粒・ロームブロックφ1～2cm密に含む。締り・粘性有。
4 暗褐色土 10YR3/3	ローム粒・鹿沼軽石φ1～10cm多量含む。締り有、粘性弱。	14 褐色土 7.5YR4/6	褐色粘土ブロックφ1～2cm・砂粒多量含む。上面に薄く黒色土が堆積し、鉄分沈着する。締り・粘性有。
5 黒褐色土 10YR2/2	ローム粒中量含む。締り有、粘性弱。	15 黒褐色土 10YR3/1	ローム粒・ロームブロックφ1～2cm中量含む。締り・粘性有。
6 黒褐色土 10YR3/2	ローム粒・ロームブロックφ1～2cm中量含む。締り・粘性有。		
7 黒褐色土 10YR3/2	ローム粒・鹿沼軽石粒中量含む。締り・粘性有。		
8 黒褐色土 10YR3/1	ローム粒・鹿沼軽石粒中量含む。締り有、粘性弱。		



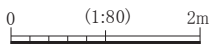
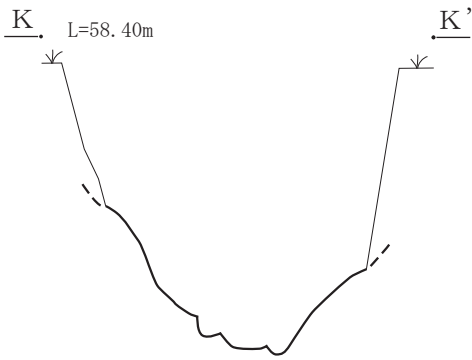
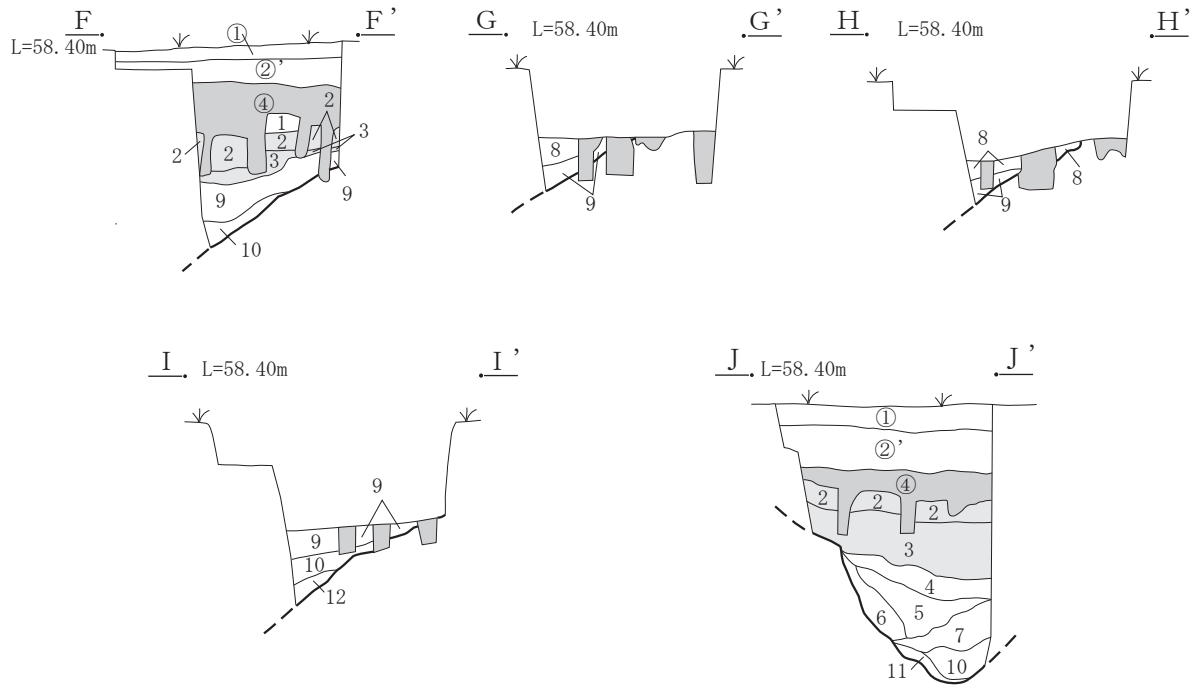
第6図 SD01の調査区分と出土遺物



第7図 I区SD01



第8図 II区SD01(1)



Ⅱ区 SD01 土層説明

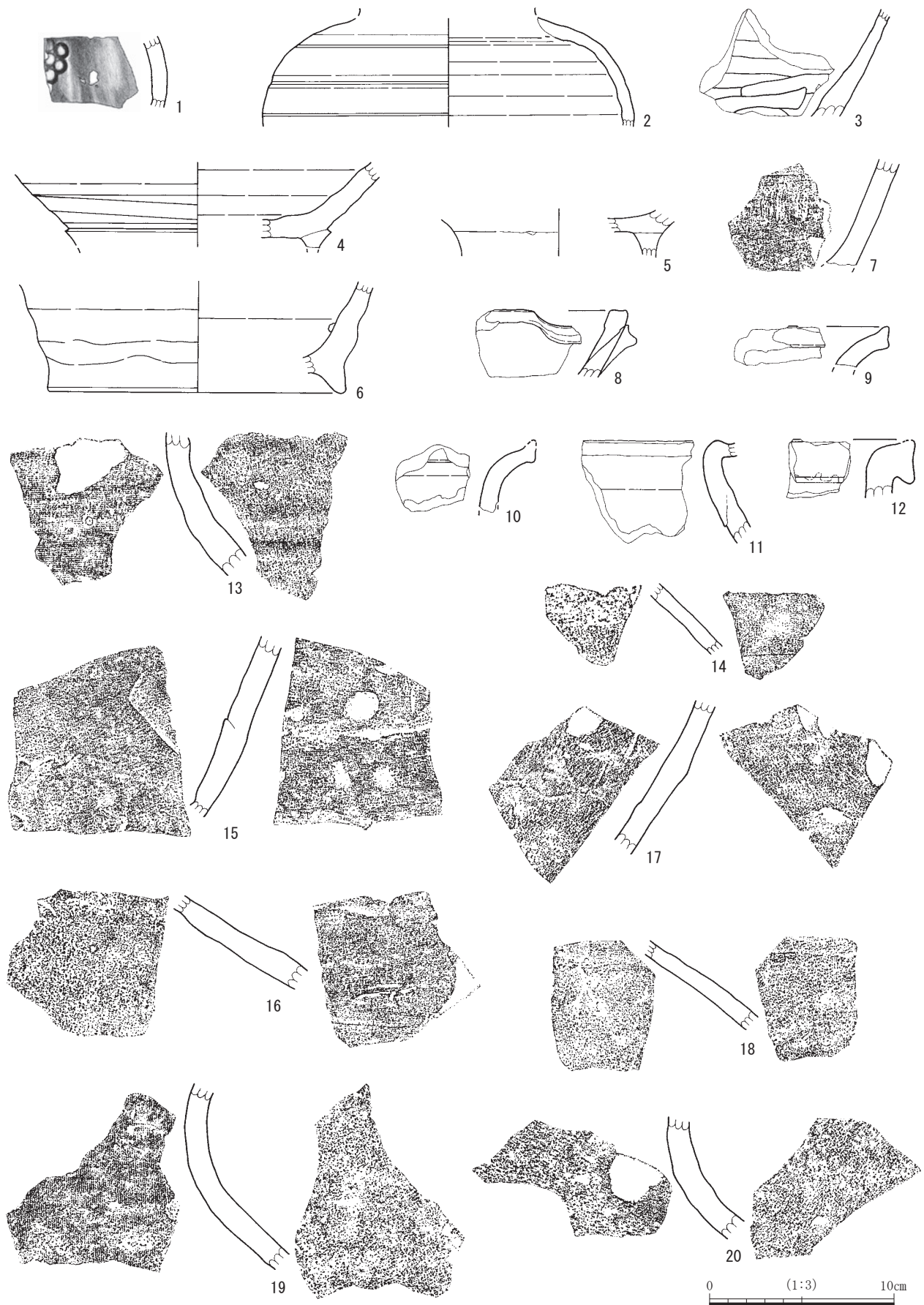
- ① 暗褐色土 10YR3/4 縮り・粘性弱。
- ② 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒多量含む。縮り有，粘性弱。
- ④ 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒・ロームブロック φ1～3cm 中量含む。縮り・粘性弱。耕作土。
- 1 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒少量含む。縮り・粘性弱。
- 2 褐色土 10YR4/6 ローム粒・ロームブロック φ1～5cm 密に含む。全体に粗い。縮り・粘性弱。土壘構築土。
- 3 褐色土 10YR4/6 ローム粒多量，ロームブロック φ1～3cm 中量含む。縮り有，粘性弱。土壘構築土。
- 4 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒少量含む。縮り有，粘性弱。
- 5 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒中量含む。縮り有，粘性弱。
- 6 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒多量含む。縮り有，粘性弱。
- 7 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒・ロームブロック φ1～3cm 中量含む。縮り・粘性有。
- 8 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒多量，ロームブロック φ1～2cm 中量含む。縮り有，粘性弱。
- 9 褐色土 10YR4/6 ロームブロック φ1～3cm 密に含む。縮り・粘性有。
- 10 灰黄褐色土 10YR4/2 ローム粒中量含む。縮り・粘性有。
- 11 褐色土 10YR4/4 ローム粒中量含む。縮り・粘性強。粘質土。
- 12 灰黄褐色土 10YR4/2 ローム粒多量含む。縮り・粘性有。

第9図 Ⅱ区 SD01 (2)

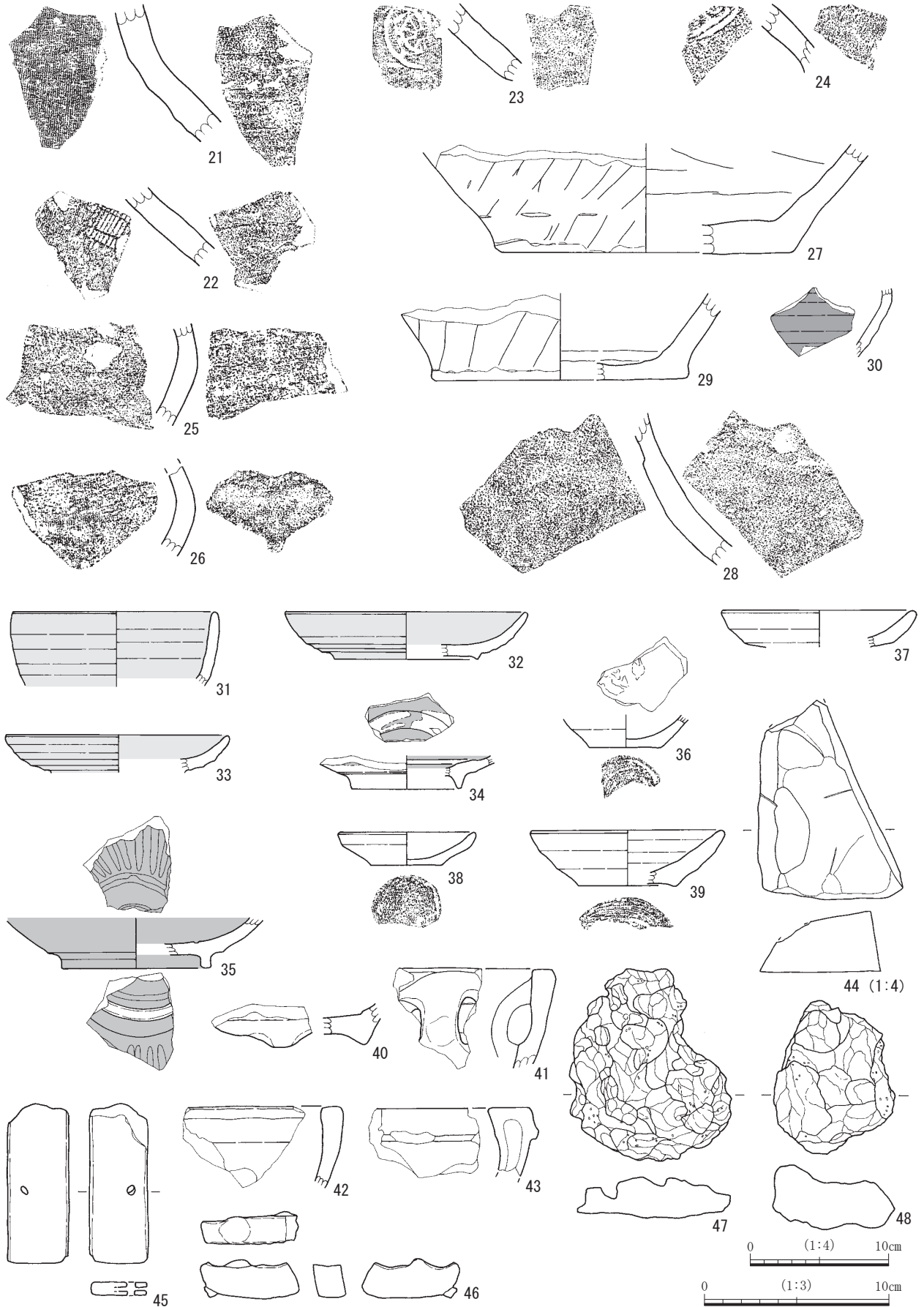
第4表 SD01 ピット計測表

〈 〉は残存値 単位=cm

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
長径	52	28	28	〈40〉	32	29	〈21〉	60	20	30	34	50	29
短径	〈32〉	27	27	〈25〉	29	〈23〉	〈20〉	38	16	〈16〉	〈20〉	50	28
深さ	49	24	33	32	41	19	15	33	48	39	57	49	50
No.	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
長径	〈20〉	46	45	35	29	45	28	36	49	40	〈20〉	34	28
短径	19	40	40	〈11〉	〈20〉	〈20〉	16	〈35〉	42	〈15〉	18	30	26
深さ	43	42	50	22	24	43	32	45	59	53	51	40	24



第10図 SD01 出土遺物(1)

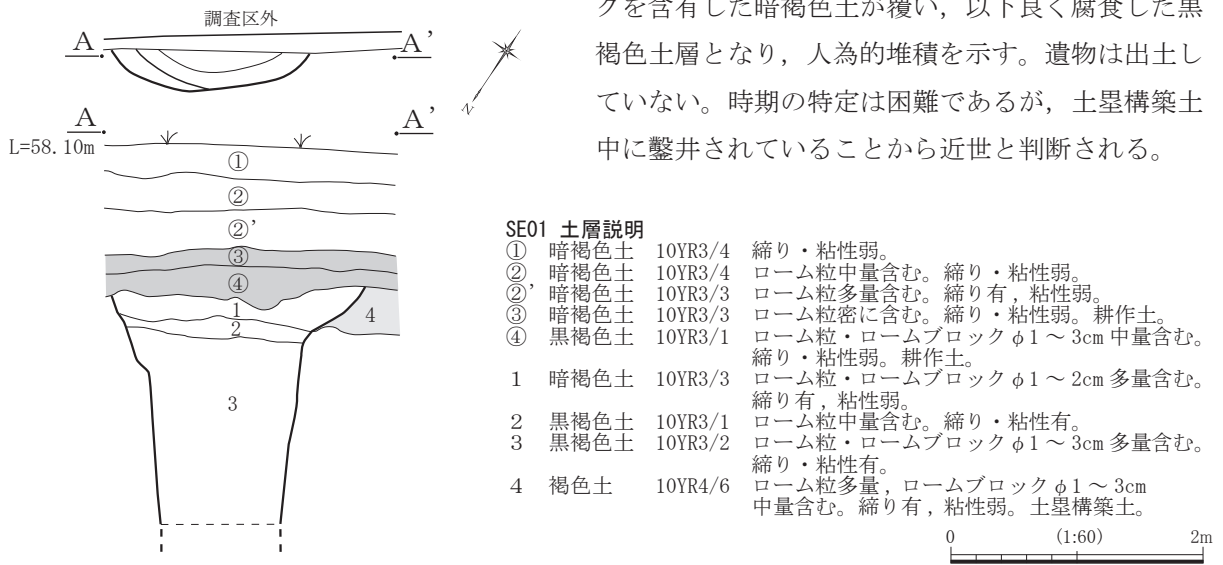


第11図 SD01 出土遺物 (2)

(3) 井戸跡

SE01 (第12図, 図版4)

II区の東端に位置し、南の大部分が調査区外になる。検出範囲は僅かで安全上から1.8mの掘り下げで調査を断念した。形態は円筒形に属するが、上部がやや開き、ハードローム層を掘り抜いて構築される。調査範囲での規模は、東西1.60m、南北0.31mを測る。覆土はローム粒・ロームブロックを含有した暗褐色土が覆い、以下良く腐食した黒褐色土層となり、人為的堆積を示す。遺物は出土していない。時期の特定は困難であるが、土塁構築土中に鑿井されていることから近世と判断される。

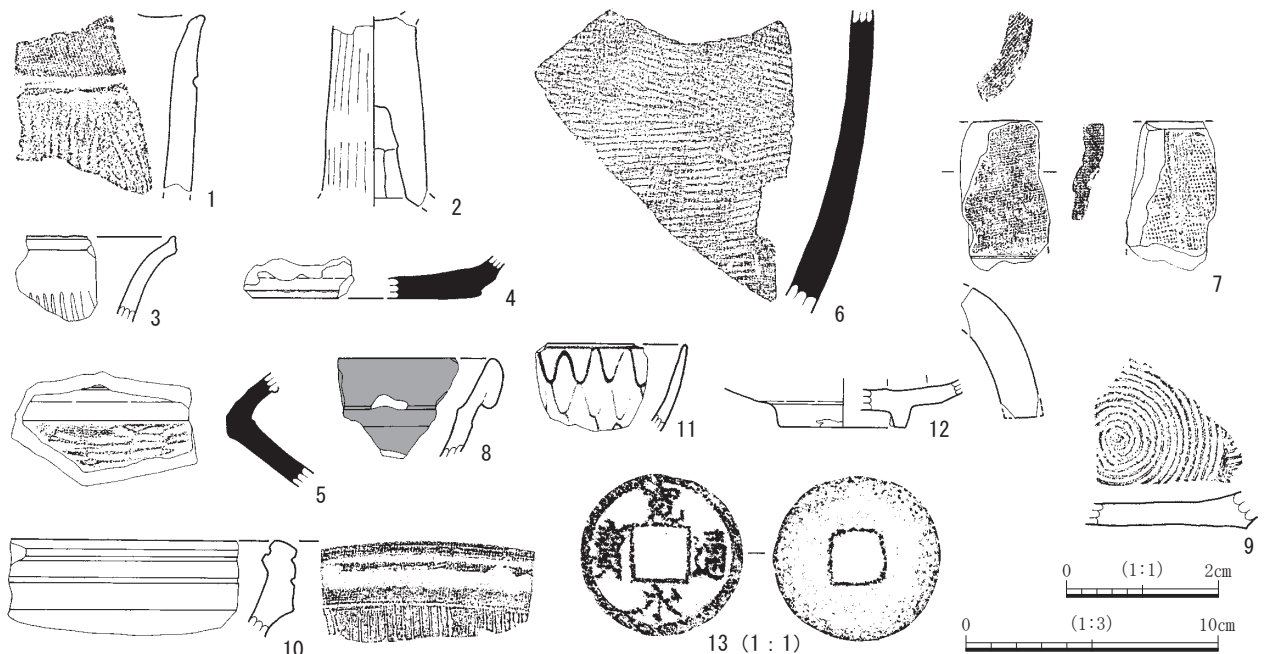


第12図 SE01

(4) 遺構外出土遺物 (第13図, 第6・7表, 図版7)

SD01からは、中世～近世初頭以外の遺物も少量出土しており、本項ではそれらを報告する。1は縄時代後期初頭、堀之内1式の深鉢片で、本調査における最古の資料である。2は古墳時代、3は古墳～平安時代、4～7は奈良・平安時代、8～13は17世紀後半～18世紀中葉の近世に比定される。

(間宮)



第13図 遺構外出土遺物

第5表 遠台遺跡出土遺物観察表(1)

遺構	遺物番号	器種	計測値(cm) 口径・底径・器高	成・整形技法,特徴	①胎土②焼成③色調	出土位置
	1	古瀬戸水注	---・〈3.8〉	体部片。体部は球形で直径10.0cm程である。水注としたが花瓶の可能性もある。外面に竹管による九曜文を押印する。鉄釉。古瀬戸中期～後期様式。14世紀。	①白色粒・黒色粒微量 ②良好 ③外:オリブ色(5Y5/4) 内:灰白色(5Y7/2)	7区上層
	2	渥美・湖西系壺	---・〈5.9〉	肩部片。肩部に僅かではあるが3条の条線が認められ三筋文壺の可能性が高い。	①石英・白色粒中量,黒色粒多量 ②良好 ③外:黒褐色(10YR3/1) 内:褐色(10YR6/1)	7区中層
	3	渥美・湖西系壺・甕類	---・〈5.8〉	胴部下端片。外面ヘラナデ。内面自然袖付着。	①石英・白色粒・黒色粒中量 ②良好 ③灰白色(5Y7/1)	5区上層
	4	常滑片口鉢	---・〈4.7〉	体部下端～底部片。体部ナデ仕上げ。下端ヘラケズリ,内面は使い込まれて滑らかである。底部高台貼り付け後ナデ。4型式。	①大粒の長石・石英・白色粒多量 ②良好 ③灰白色(5Y7/2)	1区上層
	5	常滑片口鉢	---・〈2.6〉	底部片。高台を貼り付け後ナデ仕上げ。5型式。	①大粒の長石・石英・白色粒多量 ②普通 ③褐色(10YR4/6)	7区上層
	6	常滑片口鉢	一・(16.0)・〈6.0〉	体部下端～底部片。体部及び高台ナデ仕上げ。内面に自然袖付着。重ね焼の痕跡。5型式。	①石英・白色粒・黒色粒中量 ②良好 ③灰白色(5Y8/1)	7区中層
	7	常滑片口鉢	---・〈5.8〉	体部下端片。内外面ナデ仕上げ。内面は使い込まれて滑らかである。	①長石・石英・白色粒多量 ②不良 ③黄灰色(2.5Y5/1)	7区上層
	8	常滑片口鉢	---・〈3.6〉	口縁部片。内外面ナデ仕上げ。指押えにより片口を設ける。7～8型式。	①長石・石英・白色粒多量 ②普通 ③暗褐色(10YR3/4)	7区中層
	9	常滑甕	---・〈2.2〉	口縁部片。口縁部は外反して開き,端部は面取状の紐帯に整形される。ナデ。4型式。	①長石・石英・白色粒多量 ②不良 ③褐色(10YR4/4)	2区下層
	10	常滑甕	---・〈3.3〉	口縁部片。口縁部は外反して開き,端部は面取状の紐帯に整形される。ナデ。4型式。	①石英・白色粒多量,赤褐色粒少量 ②不良 ③灰黄褐色(10YR5/2)	4区下層
	11	常滑甕	---・〈5.5〉	口縁部片。口縁部はN字状に折り返された口縁帯をもつとみられるが欠損している。ナデ。5型式。	①石英・白色粒多量 ②良好 ③褐色(5YR4/1)	7区上層
	12	常滑甕	---・〈3.2〉	口縁部片。口縁部はN字状に折り返された口縁帯をもつ。ナデ。5～6型式。	①石英・白色粒多量 ②良好 ③外:暗オリブ色(5Y4/4) 内:灰褐色(5YR4/2)	3区上層
	13	常滑甕	---・〈7.8〉	頸部片。ナデ。口縁帯の接着痕が認められないことから6b～7型式とみられる。	①石英・白色粒多量 ②良好 ③灰褐色(5YR4/2)	7区上層
	14	常滑甕	---・〈3.8〉	肩部片。ナデ。外面自然袖付着。内面に指頭痕。	①石英・白色粒多量 ②普通 ③外:にぶい褐色(7.5YR5/3) 内:にぶい黄褐色(10YR6/3)	2区下層
SD01	15	常滑甕	---・〈9.6〉	胴部下片。粘土紐輪積み成形されナデ。	①石英・白色粒多量 ②良好 ③にぶい褐色(7.5YR5/3)	7区上層
	16	常滑甕	---・〈5.0〉	肩部片。粘土紐輪積み成形されナデ。	①長石・石英・白色粒多量,砂粒微量 ②普通 ③外:にぶい赤褐色(5YR4/3) 内:灰黄褐色(10YR6/2)	4区下層
	17	常滑甕	---・〈7.8〉	胴部下片。粘土紐輪積み成形されナデ。	①石英・白色粒多量 ②良好 ③外:にぶい赤褐色(5YR5/3) 内:にぶい褐色(7.5YR5/3)	7区上層
	18	常滑甕	---・〈4.8〉	肩部片。粘土紐輪積み成形されナデ。	①石英・白色粒多量 ②普通 ③外:にぶい赤褐色(5YR5/4) 内:にぶい黄褐色(10YR6/3)	2区上層
	19	常滑甕	---・〈10.0〉	頸部片。ナデ。内面に指頭痕。口縁帯の接着痕は認められない。5～6型式。20と同一個体の可能性有。	①石英・白色粒多量 ②良好 ③外:灰オリブ色(7.5Y5/3) 内:褐色(7.5YR4/4)	7区上層
	20	常滑甕	---・〈6.6〉	頸部片。ナデ。内面に指頭痕。口縁帯の接着痕は認められない。5～6型式。19と同一個体の可能性有。	①石英・白色粒多量 ②良好 ③外:灰オリブ色(7.5Y5/3) 内:褐色(7.5YR4/4)	7区上層
	21	常滑甕	---・〈7.4〉	頸部片。ナデ。外面に厚く自然袖付着。内面に指頭痕。	①石英・白色粒・黒色粒多量 ②良好 ③外:灰オリブ色(7.5Y5/3) 内:暗赤褐色(5YR3/4)	7区上層
	22	常滑甕	---・〈4.3〉	肩部片。ナデ。外面に縦長格子目文の押印文が認められる。厚い自然袖付着。	①石英・白色粒中量,砂粒少量 ②普通 ③外:暗オリブ色(5Y4/4) 内:にぶい褐色(7.5YR5/3)	7区上層
	23	常滑甕	---・〈4.2〉	肩部片。ナデ。外面に車輪文とみられる押印文。	①石英・白色粒・黒色粒多量 ②普通 ③外:オリブ色(5Y5/4) 内:にぶい褐色(7.5YR5/3)	7区上層
	24	常滑甕	---・〈3.7〉	肩部片。ナデ。外面に意匠不明の押印文。内面に指頭痕。	①石英・白色粒密 ②普通 ③灰褐色(5YR4/2)	7区中層
	25	常滑甕	---・〈5.3〉	胴部下片。ナデ。	①長石・石英・白色粒・赤褐色粒多量 ②不良 ③外:明赤褐色(5YR5/6) 内:浅黄褐色(7.5YR8/3)	7区中層
	26	常滑甕	---・〈4.8〉	胴部下片。ナデ。	①石英・白色粒多量 ②普通 ③外:にぶい赤褐色(2.5YR4/3) 内:暗灰黄色(2.5Y5/2)	7区中層
	27	常滑甕	一・(16.0)・〈5.9〉	胴部下端～底部片。ナデ。	①大粒の礫・石英・白色粒多量 ②不良 ③外:にぶい黄褐色(10YR6/3) 内:灰黄褐色(10YR5/2)	2区下層
	28	常滑甕	---・〈7.2〉	頸部片。粘土紐輪積みにより成形しナデ。外面自然袖付着。内面に指頭痕。	①石英・砂粒・白色粒多量 ②不良 ③外:灰色(5Y6/1) 内:暗灰黄色(2.5Y4/2)	7区上層

第3章 遠台遺跡第18地点の調査成果

第6表 遠台遺跡出土遺物観察表(2)

遺構	遺物番号	器種	計測値(cm) 口径・底径・器高	成・整形技法,特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	出土位置
	29	産地不明陶器 甕	一・(14.0)・<4.6>	胴部下端～底部片。ナデ。渥美・湖西系製品の可能性がある。	①石英・白色粒多量 ②普通 ③灰白色(5Y7/1)	7区上層
	30	瀬戸・美濃 天目茶碗	一・一・<4.3>	体部片。口縁部の括れは緩やかでやや大振りな器形とみられる。17世紀前半。	①白色粒少量 ②良好 ③赤黒色(10R2/1)	2区中層
	31	美濃 志野丸碗	(11.0)・一・<4.0>	口縁部片。小振りの丸碗で厚手である。17世紀前半。	①白色粒少量 ②普通 ③灰白色(5Y8/1)	4区上層
	32	美濃 志野丸皿	(13.0)・(7.7)・2.5	1/6存。高台は輪高台で、高台脇から体部まで丁寧にヘラ調整される。全面に施釉されるが量付は拭かれている。17世紀前半。	①白色粒少量 ②普通 ③灰白色(7.5Y8/1)	5区下層
	33	美濃 志野丸皿	(12.0)・一・<2.0>	口縁部～体部片。腰部を中心に丁寧なヘラ調整。高台は削り出し輪高台とみられる。17世紀前半。	①白色粒少量 ②普通 ③灰白色(7.5Y8/1)	1区上層
	34	瀬戸・美濃 輪壳皿	一・(6.0)・<1.8>	体部下端～底部片。体部の一部と内面に灰釉が施され、見込みを蛇ノ目状に剥ぎ取っている。高台は露胎。17世紀前半の内後半に近い。	①白色粒少量 ②普通 ③灰白色(7.5Y8/2)	2区中層
	35	瀬戸・美濃 菊皿	一・(8.0)・<2.7>	1/5存。ロクロ成形後花卉を丸ノミで削り出したとみられる。高台脇回転ヘラケズリ。全面に灰釉を施すが量付は拭かれている。17世紀前半の内後半に近い。	①白色粒・赤褐色粒少量 ②普通 ③浅黄色(5Y7/4)	2区中層
	36	土師質土器 皿	一・(4.0)・<1.8>	1/4存。ロクロ成形。底部回転糸切り。内面に有機物が付着。灯明使用か。	①石英・雲母・白色粒・黒色粒多量 ②普通 ③にぶい黄褐色(10YR7/3)	2区中層
	37	土師質土器 皿	(10.4)・一・<1.9>	口縁部片。ロクロ成形。	①長石・石英・チャート・白色粒・黒色粒多量 ②普通 ③にぶい黄褐色(10YR7/4)	7区上層
SD01	38	土師質土器 皿	7.4・3.8・1.8	1/2存。ロクロ成形。口縁部は垂直気味に立ち上がる。底部回転糸切り。16世紀末～17世紀前半。	①長石・石英・雲母・チャート・白色粒・黒色粒多量 ②良好 ③浅黄褐色(10YR6/3)	4区下層
	39	土師質土器 皿	(10.4)・8.0・3.0	1/3存。ロクロ成形。底部回転糸切り。見込み横方向にナデか。16世紀末～17世紀前半。	①長石・石英・雲母・チャート・白色粒・黒色粒多量 ②良好 ③明黄褐色(10YR7/6)	5区下層
	40	土師質土器 香炉	一・一・<2.2>	体部下端～底部片。足が付き、ナデ調整とみられる。径は14cm程。	①長石・石英・チャート・砂粒・白色粒多量 ②不良 ③にぶい黄褐色(10YR6/3)	2区中層
	41	土師質土器 内耳鍋	一・一・<5.4>	耳部片。耳の断面は扁平でナデ調整。17世紀前半。	①石英・雲母・チャート・白色粒多量 ②良好 ③明褐色(7.5YR5/6)	3区中層
	42	土師質土器 内耳鍋	一・一・<4.2>	口縁部片。ナデ調整。17世紀前半。	①石英・雲母・白色粒多量 ②普通 ③黒色(10YR2/1)	3区中層
	43	瓦質土器 火鉢	一・一・<3.7>	口縁部片。ナデ調整。	①長石・石英・チャート・白色粒中量 ②不良 ③黒褐色(7.5YR3/1)	7区上層
	44	石製品 砥石	全長 14.2, 最大幅 10.4, 最大厚 4.4, 重さ 721.0g。 4/5存。部分的に平滑面が認められることから砥石とした。砂岩製か。			2区中層
	45	鉄製品 不明	全長 8.2, 幅 3.2, 厚さ 0.9, 重さ 68.1g。 完形。長方形で板状である。孔が一箇所認められる。2枚が錆着したもので、武器の一部であろうか。			7区上層
	46	鉄製品 不明	全長 5.2, 幅 2.0, 厚さ 1.5, 重さ 40.8g。 完形か。断面は矩形で緩やかに弧を描く。			4区上層
	47	炉底塊	全長 10.4, 最大幅 8.7, 最大厚 2.0, 重さ 206.2g。 破片。割られたものか。板状で緩やかに湾曲し、底面に砂が付着する。着磁性は弱い。			7区上層
	48	炉底塊	全長 8.2, 最大幅 6.6, 最大厚 3.0, 重さ 228.5g。 破片。割られたものか。緩やかに湾曲し、底面に砂が付着する。着磁性は弱い。			4区上層
	1	縄文土器 深鉢	一・一・一・<7.0>	口縁部～胴部片。波状口縁。口縁部には丁寧なヨコナデを施し、直下に沈線配置する。胴部外面は無節(L)斜め回転の縄文を施文する。内面は上部が横ナデ、下部が縦ナデ。堀之内1式。	①長石・石英・チャート・角閃石?・白色粒多量 ②良好 ③にぶい黄褐色(10YR7/3)	SD01 3区上層
	2	土師器 高坏	一・一・一・<7.5>	脚部片。外面雑なヘラミガキ。	①長石・石英・雲母・白色粒・黒色粒多量 ②普通 ③黄褐色(10YR5/6)	SD01 7区中層
	3	土師器 小壺	一・一・一・<3.4>	口縁部片。口縁部ヨコナデ。頸部ヘラミガキ。	①長石・石英・雲母・白色粒多量 ②普通 ③黒色(10YR2/1)	SD01 7区上層
	4	須恵器 坏	一・一・一・<1.7>	体部下端～底部片。ロクロ成形。体部及び底部外面手持ちヘラケズリ。	①石英少量 ②還元 ③灰白色(5Y8/1)	SD01 5区上層
	5	須恵器 甕	一・一・一・<4.5>	口縁部～胴部上半片。口縁部ヨコナデ。胴部外面横方向の平行叩。内面ヘラナデ。	①石英・白色粒多量。黒斑有 ②還元堅緻 ③灰色(5Y5/1)	SD01 7区上層
	6	須恵器 甕	一・一・一・<12.0>	胴部片。外面平行叩。	①石英・白色粒多量 ②還元堅緻 ③灰色(5Y6/1)	SD01 7区中層
	7	瓦 丸瓦	全長 5.9, 幅 3.5, 厚さ 1.5, 重さ 74.0g。破片。有段式。凸面ナデ、凹面布目、側面及び端面ヘラケズリによる面取り。		①長石・石英・白色粒多量 ②還元堅緻 ③灰色(7.5Y5/1)	SD01 7区中層
	8	瀬戸・美濃 播鉢	一・一・一・<3.9>	口縁部片。口縁部は折り返される。ヨコナデ。内外面鉄釉。17世紀後半。	①石英・白色粒中量 ②普通 ③褐色(7.5YR4/4)	SD01 3区上層
	9	瀬戸・美濃 播鉢	一・一・一・<1.4>	底部片。外面糸切り。内面渦巻状の播目。全面鉄釉。	①石英・白色粒中量 ②普通 ③褐色(7.5YR4/4)	SD01 2区中層
	10	明石・堺系 播鉢	一・一・一・<3.8>	口縁部片。ヨコナデ。播目は密。18世紀中葉。	①長石・石英・小礫・白色粒多量 ②良好 ③赤褐色(5YR4/8)	SD01 3区上層
	11	肥前系 染付碗	一・一・一・<3.4>	口縁部片。外面に網目文。17世紀末～18世紀初頭。	①白色粒少量。黒斑有 ②良好 ③明緑灰色(7.5GY8/1)	SD01 7区上層
	12	肥前系 青磁皿	一・(5.0)・<1.9>	体部～底部片。削り出し高台。見込みに蛇の目剥き。高台及び底部を露胎とし、量付に離れ砂付着。	①黒色粒少量 ②良好 ③明緑灰色(10GY8/1)	SD01 7区上層
	13	銭貨 寛永通寶	直径 2.2, 厚さ 0.1, 重さ 2.0g。 完形。銅一文銭(新寛永, 1697年初鑄)。無背銭。			SD01 7区上層

第7表 遠台遺跡出土遺物集計表

遺構 種別			SD01																		合計				
			1区			2区			3区			4区			5区			6区				7区			
			上層	中層	下層	上層	中層	下層	上層	中層	下層	上層	中層	下層	上層	中層	下層	上層	中層	下層		上層	中層	下層	
縄文	土器	深鉢						1																1	
古墳	土師器	坏	1																					1	
		高坏																					1	1	
奈良・平安	土師器	坏	1			1																2	2		
		甕																				2	2		
	須恵器	坏	1		1			1		1		1	1							1	3			10	
		蓋									1												1	1	
		高台付盤																					1	1	
	瓦	丸瓦	壺	1									1										1	3	
			甕		1				1	1			1										4	2	10
古墳～平安	土師器	小壺																				1		1	
		甕		1				1	1					1								3		7	
中世	古瀬戸	水注																				1		1	
		片口鉢	4型式	1																					1
	5型式																						1	1	2
	7～8型式																						1		1
	不明											2			1							1		4	
	常滑	甕	4型式				1						1												2
			5型式																				1		1
		5～6型式						1															2		3
		6b～7型式																					1		1
	渥美・湖西系	土師質土器	甕	3			1	1	4	1	1	1	1		3	1							19	11	47
			壺				1				1												2		4
壺・甕						1			1					1	1								2		4
中世末～近世初頭	瀬戸・美濃	壺・甕				1																		1	
		天目茶碗					1																	1	
		菊皿					1																	1	
		輪禿皿（灰釉）					1																1		1
		播鉢（鉄釉）																					1		1
		志野丸碗											1												1
	志野丸皿	1																		1				2	
土師質土器	皿					1								1							1		4		
	内耳鍋									4												1		5	
	香炉					1																	1		
瓦質土器	火鉢	火鉢								1												1		2	
		染付碗										1								1			1	3	
近世	肥前系	青磁皿																				1		1	
		香炉（灰釉）					1								1									2	
	瀬戸・美濃	灯明受皿（鉄釉）													1									1	
		播鉢（鉄釉）					1		1															2	
	明石・堺系	播鉢							1															1	
		皿								1		3												4	
	土師質土器	鍋					1										1							2	
		鍋類					1																	1	
		不明												1										1	
	不明陶器	不明												1										1	
時期不明	銭貨	銅一文銭（新寛永）																				1		1	
	石製品	砥石					1																1		
	鉄製品	不明											1									1	2		
	炉底塊・鉄滓			1						1		1		1	1							3	1	9	
計			10	2	0	5	10	7	8	11	2	15	0	11	7	0	2	1	0	0	49	26	0	166	

※個体は中世末～近世初頭の土師質土器皿（4区下層）と銭貨、石製品、鉄製品の合計5点で、他は全て破片である。

第4章 八幡神社周辺古墳群第1地点の調査成果

第1節 調査区の地形と基本堆積土層

調査は、八幡神社周辺古墳群第11号墳の東側で実施した。現況は農道と畑地である。調査区の地勢は、農道部分が高く、畑地が低い。標高は60m前後を計測し、北端部においてTP01を掘り下げ基本堆積土層を観察・記録した。

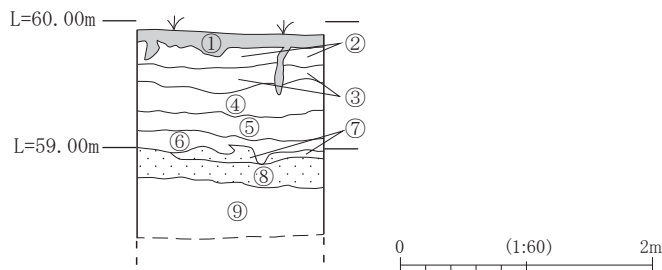
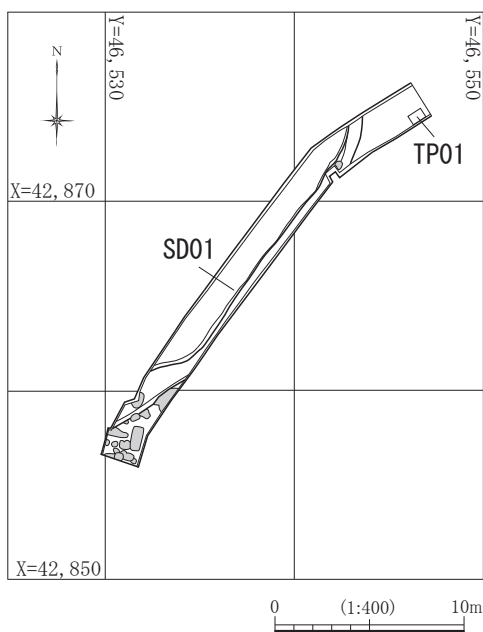
TP01を設定した場所は畑地として利用されており、①層の表土層は黒褐色土の耕作土である。表土を除去するとハードローム層の明黄褐色土層になる。このことから、当地は後世に削平を受けたことが明らかになっている。③層以下のハードローム層は、下部になる程粘性と締まりを増し、鹿沼軽石粒を多量に含んだ⑥層のにぶい黄褐色土層を経て、⑦・⑧層の鹿沼軽石層、さらに⑨層の粘土層に至る。鹿沼軽石層は粒径により二層に分層できたが、遠台遺跡TP02にみる分断は検出されなかった。

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 概要

今次調査は、八幡神社周辺古墳群の中でも西端に位置する第11号墳の隣地で実施し、同古墳の周溝を検出した。他の遺構は検出されていない。周溝は深さが1.18mで、古墳の形態は、試掘調査の成果を加味すると、南部分がやや直線状になるものの緩やかに弧を描くことから円墳と判断される。

遺物は、周溝内から162点、収納箱1箱分が出土した。何れも破片資料で、個体は土師器坏（高台付）と不明石製品の2点のみである。遺物は、弥生時代後期後半十王台式の広口壺を最古に、古墳時代の土師器・埴輪・石製品、奈良・平安時代の土師器・須恵器、中世の常滑・渥美・湖西系製品、時期不明の炉底塊・鉄滓が確認される。主体は埴輪で、判別可能な資料では朝顔形や円筒埴輪が占め、形象埴輪は認められない。埴輪は横方向の内面調整を施すなど、6世紀前半の所産と位置付けられる。



基本堆積土層

- ① 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒多量含む。締り・粘性なし。耕作土。
- ② 明黄褐色土 10YR6/6 白色粒・黒色粒中量、赤褐色粒少量含む。締り・粘性有。ハードローム層。
- ③ 黄褐色土 10YR5/8 白色粒・黒色粒中量、赤褐色粒微量含む。締り強、粘性有。ハードローム層。
- ④ にぶい黄褐色土 10YR5/4 黄色粒・白色粒少量、黒色粒微量含む。締り強、粘性有。ハードローム層。
- ⑤ にぶい黄褐色土 10YR5/4 黄色粒・白色粒・黒色粒中量含む。締り強、粘性有。ハードローム層。
- ⑥ にぶい黄褐色土 10YR5/4 鹿沼軽石粒多量含む、白色粒・黒色粒少量含む。締り強、粘性有。
- ⑦ 黄橙色土 10YR7/8 粒径の細い鹿沼軽石粒密に含み、白色粒・黒色粒中量含む。締り強、粘性有。鹿沼軽石層。
- ⑧ 黄橙色土 10YR7/8 粒径の粗い鹿沼軽石粒密に含み、白色粒・黒色粒中量含む。締り強、粘性有。鹿沼軽石層。
- ⑨ 暗褐色土 10YR3/3 白色粒少量含む。締り・粘性強。粘土層。

第14図 八幡神社周辺古墳群第1地点の全体図と基本堆積土層

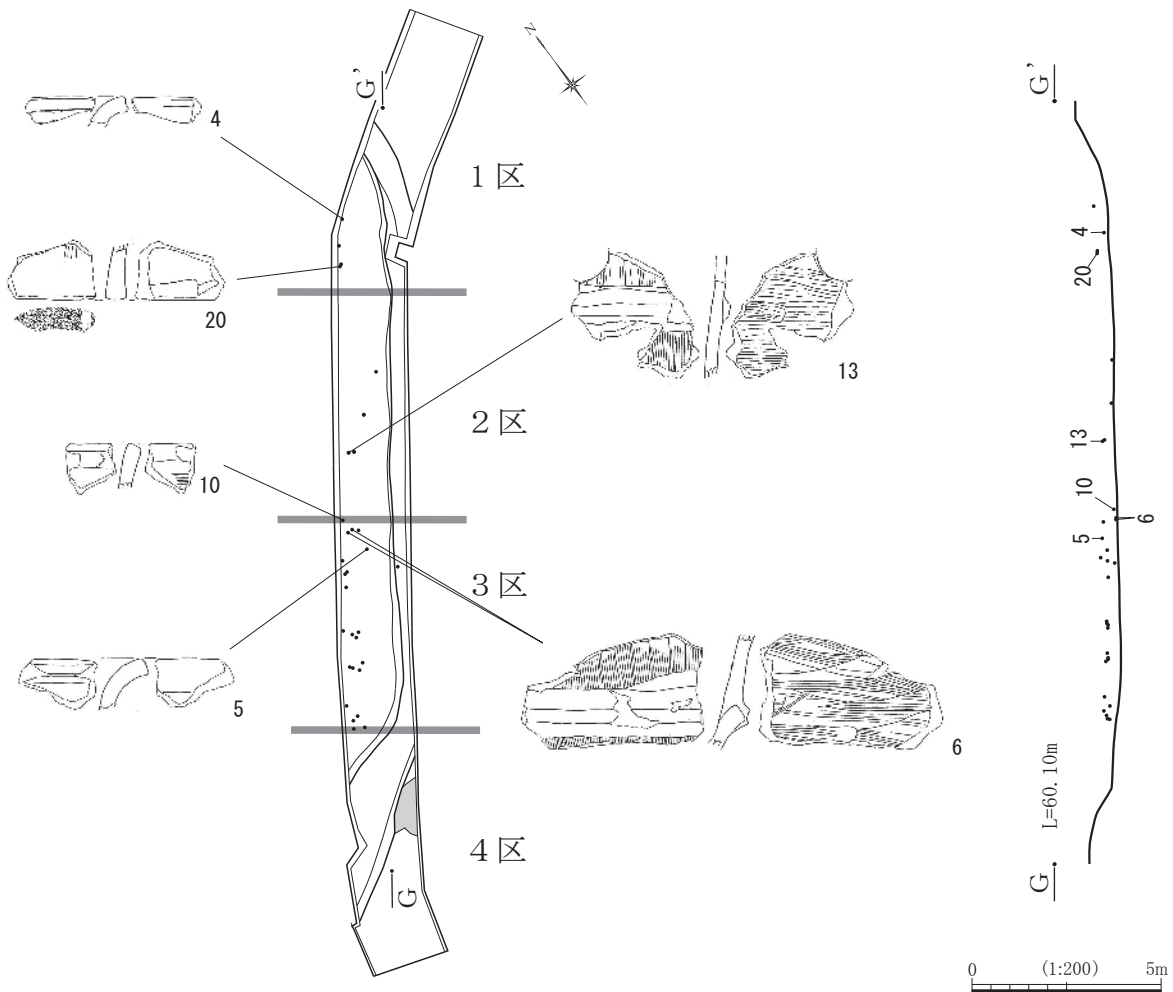
(2) 周溝

SD01 (第15・16・17図, 第8・9・10表, 図版8・9・10・11)

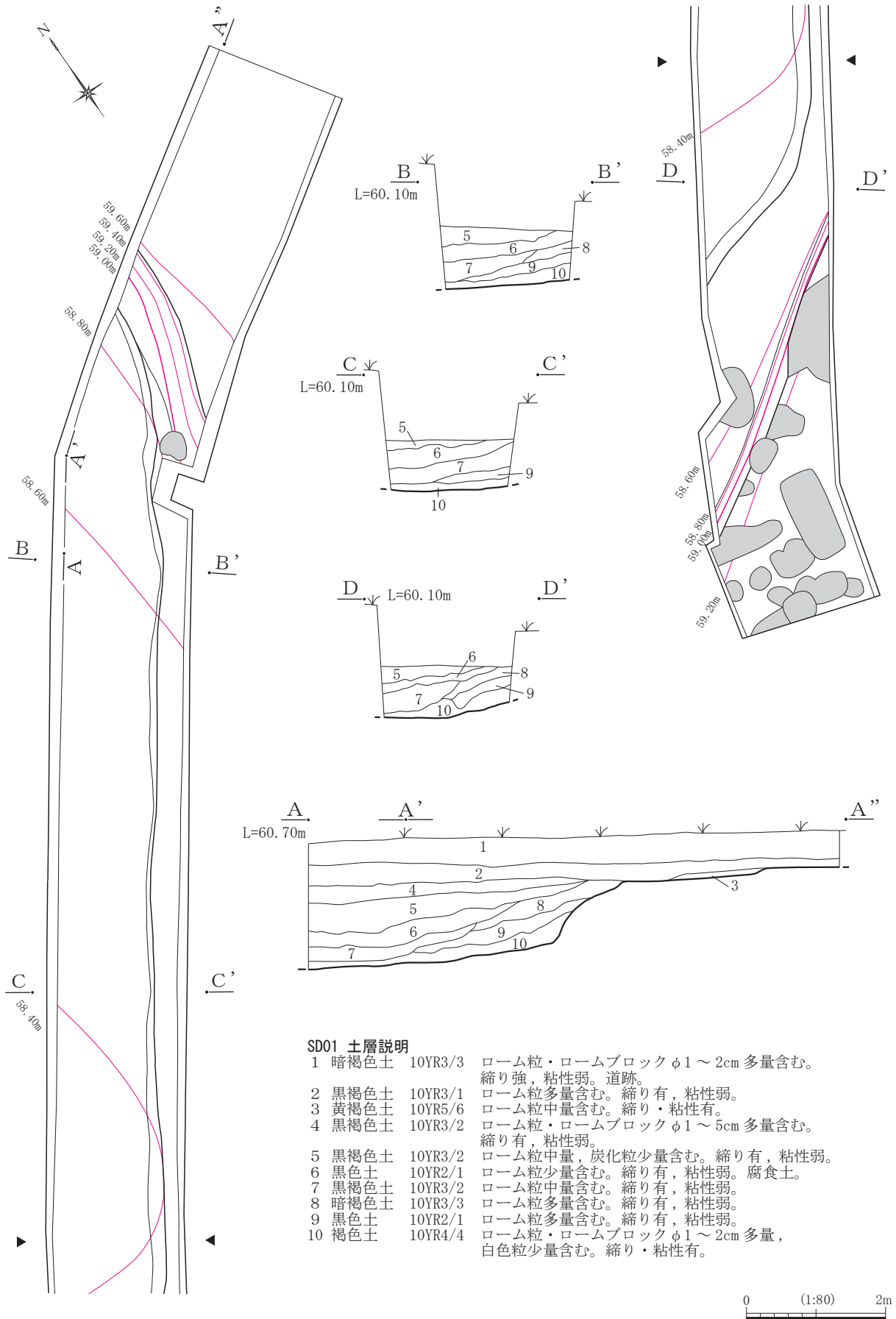
調査区のほぼ全域から検出された。検出長は南北20.80m, 東西2mで, 西の調査区外へと延びる。北と南部分で外壁の上端部が確認され, 北の検出状況から全体に緩やかに弧を描くとみられるが, 南部分ではやや直線状になる。壁は急激に立ち上がり上部で開く。土層断面にみる深さは1.18mである。底面は概ね平坦なもの, 外壁へ向けてやや高くなり僅かな段をもつ。この状況と試掘調査の成果から調査区は, 周溝の外縁付近に設定されていると理解される。覆土は底面に褐色土, 壁際に暗褐色土が確認され, その他の大部分に黒褐色土及び黒色土が堆積する。全体に良く腐食している。

遺物は162点が出土し, 埴輪は116点を数える。底面から得られた資料は少なく, 埴丘側に偏在していた。種別を判別できる埴輪片は, 朝顔形や円筒埴輪で占められ, 形象埴輪は認められない。ヘラ書きが1点(15)のみ確認される。埴輪の胎土は長石・石英・雲母・チャート・白色粒を多量に含み, 全体に砂っぽい質感である。なお, 覆土の中・下層から, 丸底で, 体部に稜をもちながら口縁部が大きく外反する土師器の坏(1・2)が出土している。また, 23の用途不明の石製品は, 縄文時代の粘板岩製小型磨製石斧の可能性もある。ただ, 当該期の資料が出土していないためここで報告しておく。

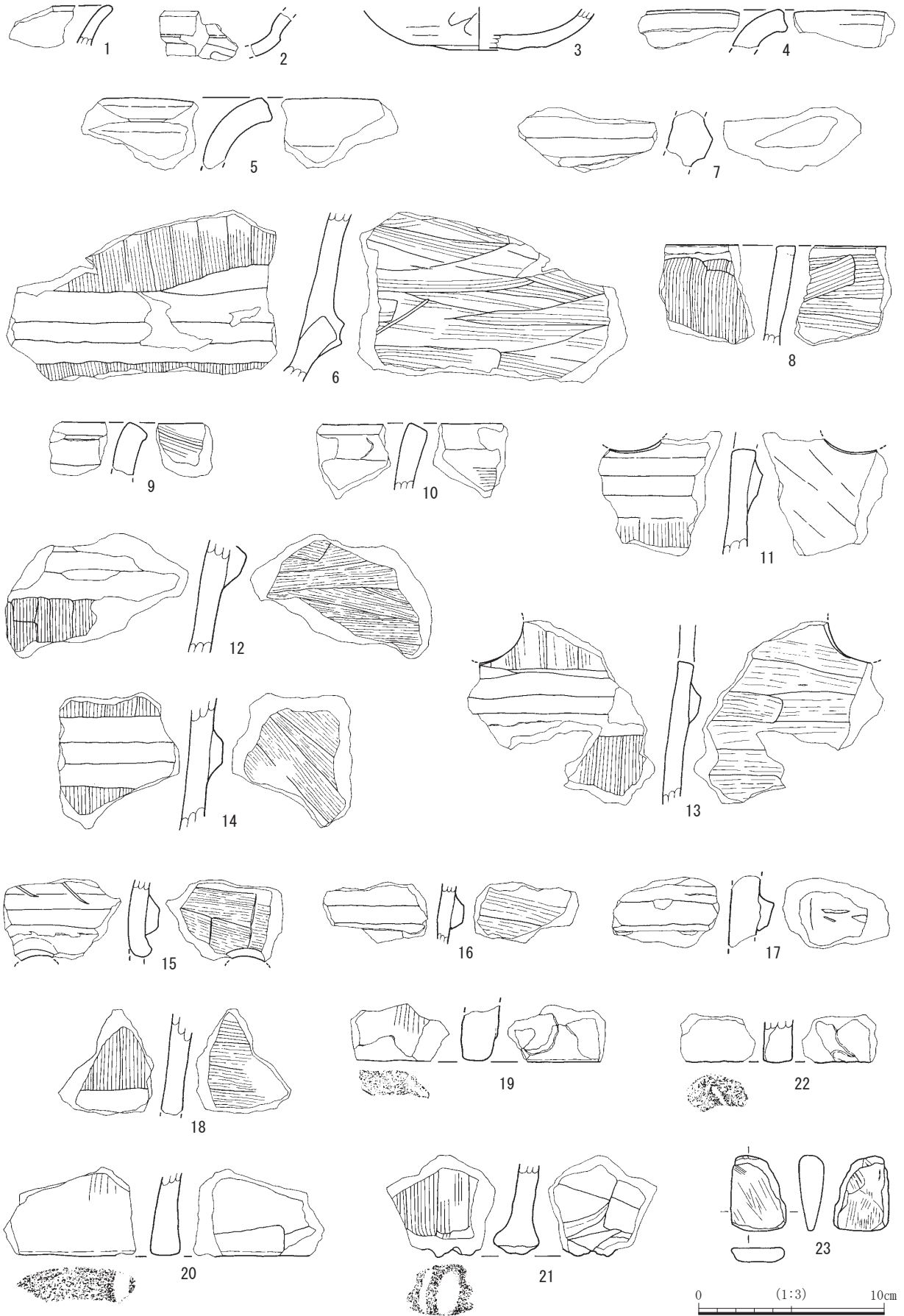
時期は, 土師器の坏の形態と, 埴輪の内面調整が横方向であることから6世紀前半と判断した。



第15図 SD01の調査区分と出土遺物



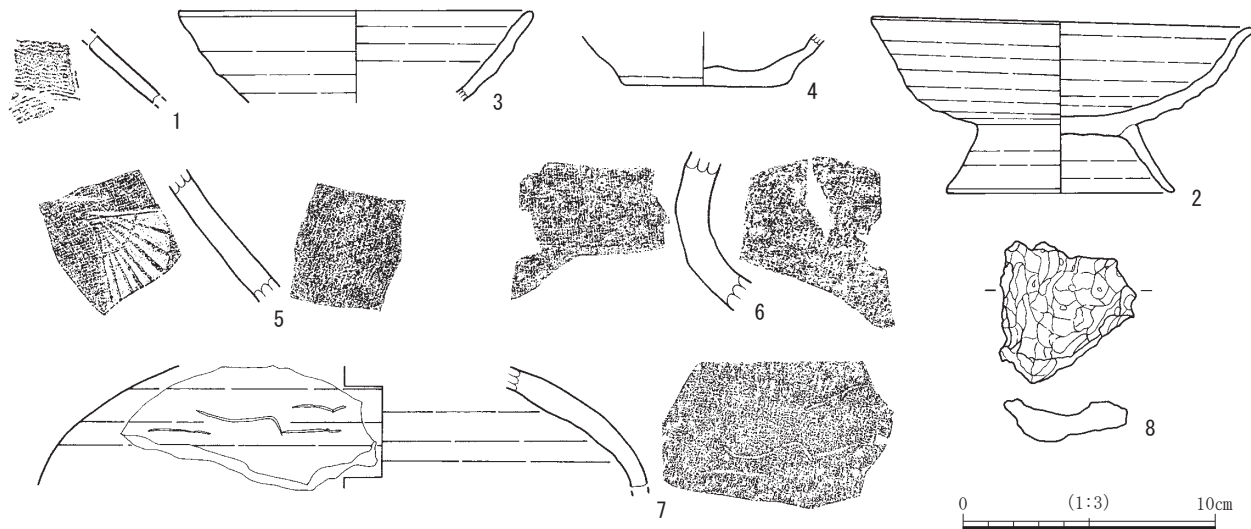
第16図 SD01



第17図 SD01 出土遺物

(3) 遺構外出土遺物(第18図, 第9・10表, 図版11)

周溝内からは古墳時代以外の遺物が少量出土しており, 本項において報告する。詳細は表に記載したが, 何れも覆土中層以上の出土であった。1は弥生土器の広口壺の頸部片で, 後期後半の十王台式に比定される。2~4は平安時代の土師器の坏(高台付)・甕である。5~7は中世に帰属する甕・壺で, 5・6は常滑製品, 7は渥美・湖西系製品である。5には扇文とみられる押印文が施され, 6は口縁帯の接合痕が認められないことから6b~7型式に比定される。なお, 7の壺は小型で線刻が施されており, 何らかの絵が描かれていた可能性もある。8は炉底塊とみられ割られていた。(間宮)



第18図 遺構外出土遺物

第8表 八幡神社周辺古墳群出土遺物観察表(1)

遺構	遺物番号	器種	計測値(cm) 口径・底径・器高	成・整形技法, 特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	出土位置
	1	土師器 坏	---・〈2.2〉	口縁部片。ヨコナデ。	①石英・雲母・チャート・白色粒多量 ②良好 ③赤褐色(2.5YR4/6)	2区下層
	2	土師器 坏	---・〈2.4〉	口縁部~体部片。口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。6世紀前半。	①石英・雲母・チャート・白色粒多量 ②良好 ③赤褐色(5YR4/6)	2区中層
	3	土師器 坏	---(7.0)・〈2.3〉	体部~底部片。ヘラケズリ。	①長石・石英・雲母・チャート・白色粒多量 ②普通 ③明赤褐色(5YR5/6)	2区上層
	4	埴輪 朝顔形埴輪	---・〈2.1〉	口縁部片。ヨコナデ。	①長石・石英・雲母・チャート・白色粒多量。 砂っぽい ②普通 ③黄褐色(10YR5/6)	1区 底上17cm
	5	埴輪 朝顔形埴輪	---・〈3.8〉	口縁部片。ヨコナデ。	①長石・石英・雲母・チャート・白色粒多量。 砂っぽい ②普通 ③黄褐色(10YR5/6)	3区 底上44cm
	6	埴輪 朝顔形埴輪	---・〈9.1〉	口縁部片。擬口縁。突帯貼り付け後ヨコナデ。外面タテハケ, 内面ヨコハケ後ヨコナデ。突帯は台形状。	①長石・石英・雲母・チャート・白色粒多量。 砂っぽい ②普通 ③明赤褐色(5YR5/6)	3区 底上6cm
	7	埴輪 朝顔形埴輪	---・〈3.3〉	口縁部片。突帯貼り付け後ヨコナデ。突帯は台形状。	①大粒の長石・石英・雲母・チャート・白色粒多量。 砂っぽい ②普通 ③橙色(7.5YR6/6)	2区上層
SD01	8	埴輪 円筒埴輪	---・〈5.4〉	口縁部片。外面タテハケ, 内面ヨコハケ。	①長石・石英・白色粒多量 ②良好 ③明赤褐色(5YR5/6)	4区上層
	9	埴輪 円筒埴輪	---・〈2.9〉	口縁部片。外面ヨコナデ, 内面ヨコハケ後ヨコナデ。	①長石・石英・雲母・白色粒多量。砂っぽい ②普通 ③橙色(5YR6/6)	3区中層
	10	埴輪 円筒埴輪	---・〈4.0〉	口縁部片。外面ヨコナデ, 内面ヨコハケ後ヨコナデ。	①長石・石英・雲母・白色粒多量。砂っぽい ②普通 ③橙色(7.5YR6/6)	2区 底上13cm
	11	埴輪 円筒埴輪	---・〈6.6〉	体部片。突帯貼り付け後ヨコナデ。外面タテハケ, 内面ナメナメ。突帯は台形状。	①長石・石英・雲母・チャート・白色粒多量。 砂っぽい ②普通 ③橙色(7.5YR6/6)	4区上層
	12	埴輪 円筒埴輪	---・〈6.0〉	体部片。突帯貼り付け後ヨコナデ。外面タテハケ, 内面横方向の板ナデ。突帯は台形状。	①長石・石英・雲母・チャート・白色粒多量。 砂っぽい ②普通 ③褐色(7.5YR4/6)	2区上層
	13	埴輪 円筒埴輪	---・〈9.7〉	体部片。2~3段片であろう。突帯貼り付け後ヨコナデ。外面タテハケ, 内面横方向の板ナデ。突帯は台形状。	①長石・石英・雲母・チャート・白色粒多量。 砂っぽい ②普通 ③橙色(7.5YR6/6)	2区 底上36cm
	14	埴輪 円筒埴輪	---・〈7.3〉	体部片。突帯貼り付け後ヨコナデ。外面タテハケ, 内面斜め方向の板ナデ。突帯は台形状。	①長石・石英・雲母・チャート・白色粒多量。 砂っぽい ②普通 ③明褐色(7.5YR5/6)	4区上層

第9表 八幡神社周辺古墳群出土遺物観察表(2)

遺構	遺物番号	器種	計測値(cm) 口径・底径・器高	成・整形技法, 特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	出土位置
SD01	15	埴輪 円筒埴輪	---・〈4.4〉	体部片。突帯貼り付け後ヨコナデ。内面横方向の板ナデ。突帯は台形状。外面にヘラ書き。	①長石・石英・雲母・チャート・白色粒多量。砂っぽい ②普通 ③橙色(5YR6/6)	2区上層
	16	埴輪 円筒埴輪	---・〈3.3〉	体部片。突帯貼り付け後ヨコナデ。内面横方向の板ナデ。突帯は台形状。	①長石・石英・雲母・白色粒多量。砂っぽい ②普通 ③明赤褐色(5YR5/6)	2区上層
	17	埴輪 円筒埴輪	---・〈3.8〉	体部片。突帯を貼り付け後ヨコナデ。	①長石・石英・雲母・チャート・白色粒多量。砂っぽい ②普通 ③橙色(5YR6/6)	3区上層
	18	埴輪 円筒埴輪	---・〈5.7〉	口縁部片。外面タテハケ、内面ヨコハケ、横方向の板ナデ。	①長石・石英・雲母・白色粒多量。砂っぽい ②普通 ③明赤褐色(5YR5/6)	2区上層
	19	埴輪 円筒埴輪	---・〈3.0〉	基部片。外面タテハケ、内面に粘土帯の合わせ痕か。「の」の字状接合か。	①長石・石英・雲母・白色粒多量。砂っぽい ②普通 ③褐色(7.5YR6/6)	2区上層
	20	埴輪 円筒埴輪	---・〈4.7〉	基部片。外面タテハケ、内面ヨコナデ。底面籐圧痕。	①長石・石英・雲母・チャート・白色粒多量。砂っぽい ②不良 ③褐色(7.5YR4/6)	1区 底上40cm
	21	埴輪 円筒埴輪	---・〈5.4〉	基部片。外面タテハケ、内面横方向の板ナデ。底面籐圧痕。	①長石・石英・雲母・白色粒多量。砂っぽい ②不良 ③褐色(7.5YR4/6)	2区上層
	22	埴輪 円筒埴輪	---・〈2.3〉	基部片。内外面共に磨耗する。内面に粘土帯の合せ痕。逆「の」の字状接合。	①長石・石英・雲母・白色粒多量。砂っぽい ②普通 ③褐色(7.5YR4/6)	4区上層
	23	石製品 不明	全長4.0, 最大幅2.9, 最大厚1.4, 重さ20.7g。完形品。斧などの模造品か。縄文時代の小型磨製石斧の可能性もあるが、当該期の資料が出土していないため古墳時代の所産としておく。粘板岩製。		2区下層	
遺構外	1	弥生土器 広口壺	---・〈2.2〉	頸部片。縦のスリットと弧線により文様を表出する。十玉台式。	①長石・石英・雲母・白色粒中量 ②普通 ③褐色(5YR6/6)	SD01 3区中層
	2	土師器 坏 (高台付)	15.0・9.0・7.0	3/5存。体部ロクロナデ。底部高台を貼り付け後ロクロナデ。	①長石・石英・黒色粒多量, 雲母・白色針状物質・白色粒少量 ②普通 ③淡黄色(2.5Y8/3)	SD01 3区 底上30cm
	3	土師器 坏	(14.0)・---・〈3.6〉	口縁部~体部片。ロクロナデ。二次被熱。	①長石・石英・雲母・白色針状物質・白色粒・黒色粒多量 ②普通 ③にぶい黄褐色(10YR7/3)	SD01 3区 底上30cm
	4	土師器 甕	---・6.5・〈2.1〉	胴部下端~底部片。ナデ。	①長石・石英・雲母・白色針状物質・白色粒多量 ②不良 ③灰褐色(10YR4/1)	SD01 4区上層
	5	常滑 甕	---・---・〈4.5〉	肩部片。ナデ。外面に扇文とみられる押印文が認められる。	①石英・白色粒中量。黒斑有 ②良好 ③灰褐色(5YR4/2)	SD01 2区上層
	6	常滑 甕	---・---・〈8.2〉	頸部片。ナデ。外面自然袖付着。口縁帯の接合痕が認められないことから、6b~7型式とみられる。	①石英・白色粒多量 ②良好 ③外:オリーブ黒色(5Y3/1) 内:灰オリーブ色(5Y4/2)	SD01 1区 底上30cm
	7	渥美・湖西系 壺	---・---・〈4.7〉	肩部片。小型である。上半径25cm。ナデ。外面に線刻有。絵の一部か。	①石英・白色粒中量, 白色針状物質微量。黒斑顕著 ②普通 ③外:灰色(5Y4/1) 内:灰色(7.5Y5/1)	SD01 2区上層
	8	炉底塊	全長(5.5), 最大幅(5.3), 最大厚1.7, 重さ(68.7g)。破片。割られたものか。緩やかに湾曲する。着磁性は弱い。			SD01 3区上層

第10表 八幡神社周辺古墳群出土遺物集計表

種別	遺構名	SD01												合計		
		1区			2区			3区			4区					
		上層	中層	下層	上層	中層	下層	上層	中層	下層	上層	中層	下層			
弥生	土器	広口壺									1					1
古墳	土師器	坏				1	1	1	1	2		1				7
		甕						1			1					2
	埴輪	朝顔形			1	1				1	1					4
		円筒		2		13	5	1	8	4	1	6				40
	不明	4	1		4	18	17	8	9	7	4				72	
	石製品	不明						1							1	
奈良・平安	土師器	坏							1	5					6	
		甕										1		1	2	
	須恵器	坏									2				2	
古墳~平安	土師器	坏								1					1	
		甕				1	2	1	2	1		2			9	
中世	常滑	甕	6b~7型式		1										1	
			不明				1								1	
		壺・甕										1	2		3	
	渥美・湖西系	壺				1									1	
	産地不明	壺・甕							1						1	
時期不明	炉底塊・鉄滓									2					2	
	不明品		1			2				3					6	
合計			5	4	1	24	26	22	23	27	10	16	1	3	162	

※個体は奈良・平安時代の土師器坏(3区中層)と古墳時代の石製品の合計2点で、他は全て破片である。

第5章 総括

第1節 土地利用の変遷

今次調査は、遠台遺跡と八幡神社周辺古墳群の二地点において実施されたものである。しかし、八幡神社周辺古墳群は遠台遺跡に包括されており、一つの遺跡とも捉えられることから、ここでは両者を併せて土地利用の変遷を辿ることにする。

遠台遺跡は、採取された遺物により縄文時代からはじまる包蔵地として周知されてきたが、第18地点のⅠ区において、遺構には伴わないものの縄文時代後期初頭の堀之内1式土器が出土し、本調査での最も古い遺物になった。一方、八幡神社周辺遺跡群からは、やはり遺構には伴ってはいないが弥生時代後期後半の十王台式土器を得ており、調査区周辺には縄文時代後期初頭と弥生時代後期後半の遺構が埋蔵されている可能性を示す。ただし、得られた資料は共に一点ずつであり、少なくとも調査区周辺に限ってみれば集落が存在したとしてもその密度は希薄なようである。

今次調査で確認した最も古い遺構は、八幡神社周辺古墳群第11号墳の周溝(SD01)である。周溝の上端幅は、試掘調査の成果を加味すると6.5mと広く、深度も1.18mを計測し、しっかりとした構築である。周溝内からは、埴輪片と共に土師器の坏が出土しており、6世紀前半に比定される。第11号墳はこの時期の築造とみて大過ないであろう(詳細は第2節参照)。

続く奈良・平安時代には土器片を採取しているが、遺構は検出されていない。集落の展開を示唆するものの具体的な様相までは不明である。

中世に入ると遠台遺跡のⅠ区とⅡ区からは、堀跡(SD01)が検出され、13～14世紀と16世紀末～17世紀前半に二分される遺物が出土している。前者は常滑製品の甕と片口鉢の数量が多く、後者は瀬戸・美濃製品が主体となっていた。詳細については第3節で扱ったが、堀跡は台地の傾斜がはじまる縁辺部に直線状に構築され、その全長は100m以上にわたる。形態は葉研状の空堀で、上端幅は推定で5mを計測し、北側に土塁を伴っていた。堀跡は城館跡の一部と認識され、時期については、16世紀末～17世紀前半の近世初頭に位置付けた。堀は、機能停止後早い段階で埋め戻されており、その後近世内において井戸(遠台遺跡SE01)が構築されている。

なお、13世紀代の遺物は、常滑製品の甕と片口鉢で占められている。これらの器種は中世墓の蔵骨器とその蓋に二次利用されることが多く、古墳に結縁して営まれた中世墓の存在を示すものと理解した。

また、遺跡西端のⅠ区においては、堀が埋め戻された後、時期不明ながら大きく削平による地形改変がなされている。この時、僅かながら残されていた城館跡の痕跡も消滅したものかもしれない。

第2節 八幡神社周辺古墳群第11号墳について

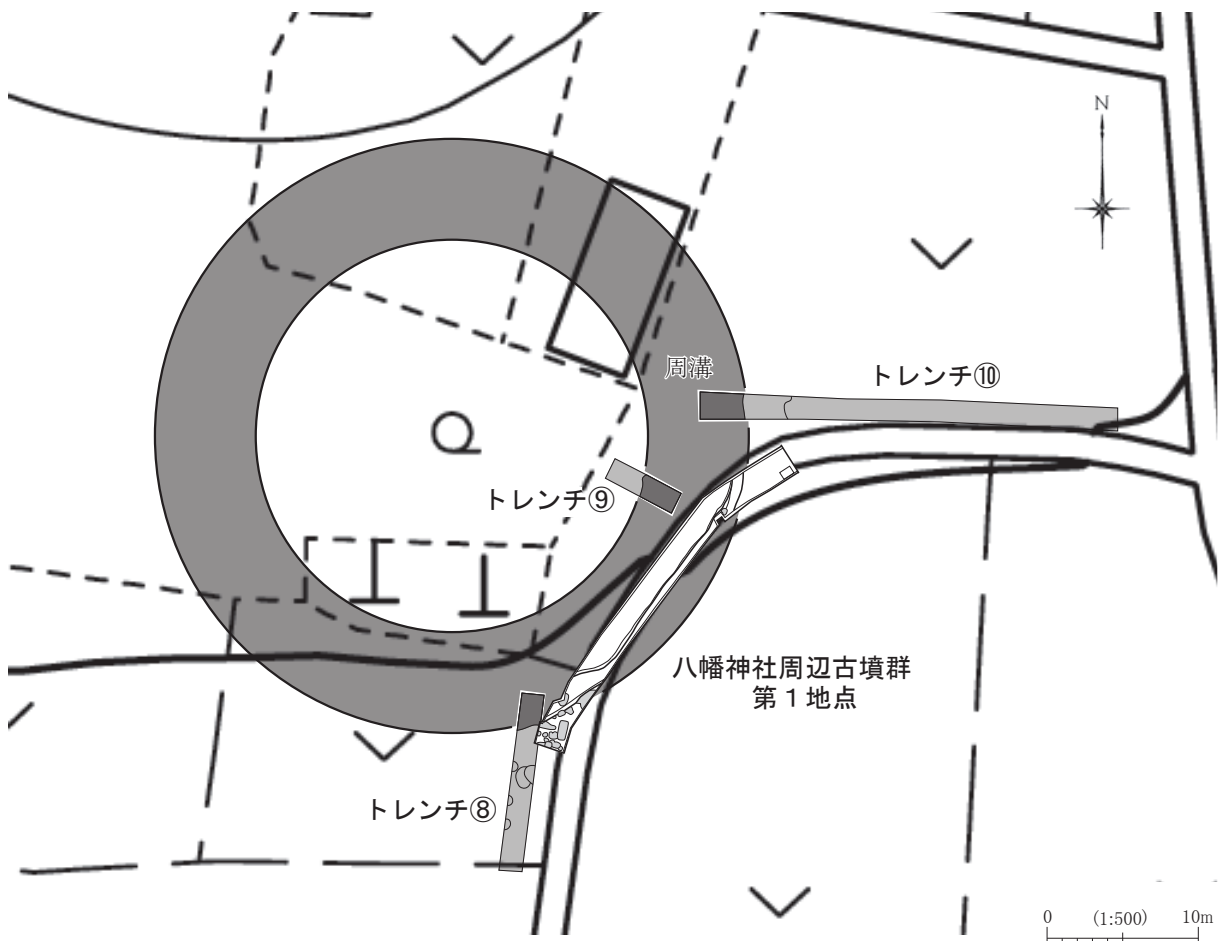
八幡神社周辺古墳群は、八幡神社周辺の東西250m、南北200mの範囲に前方後円墳を伴う13基で構成される。さらに、開墾・耕作によって複数の古墳が消滅したともいい、埴輪片の散布が二カ所で認められていることから、全体では15基を数えそうである(内原町史編さん委員会1996)。

今次調査は、古墳群範囲の西端部に位置する第11号墳(旧No.200)の周溝部分において実施された。第11号墳は墳丘の南部分に墓地が造られるなど後世に改変を受けているが、平成3年(1991)の「埋蔵文化財包蔵地調査カード」以降、直径25m、高さ5mの円墳とされてきた。調査の結果、周溝の

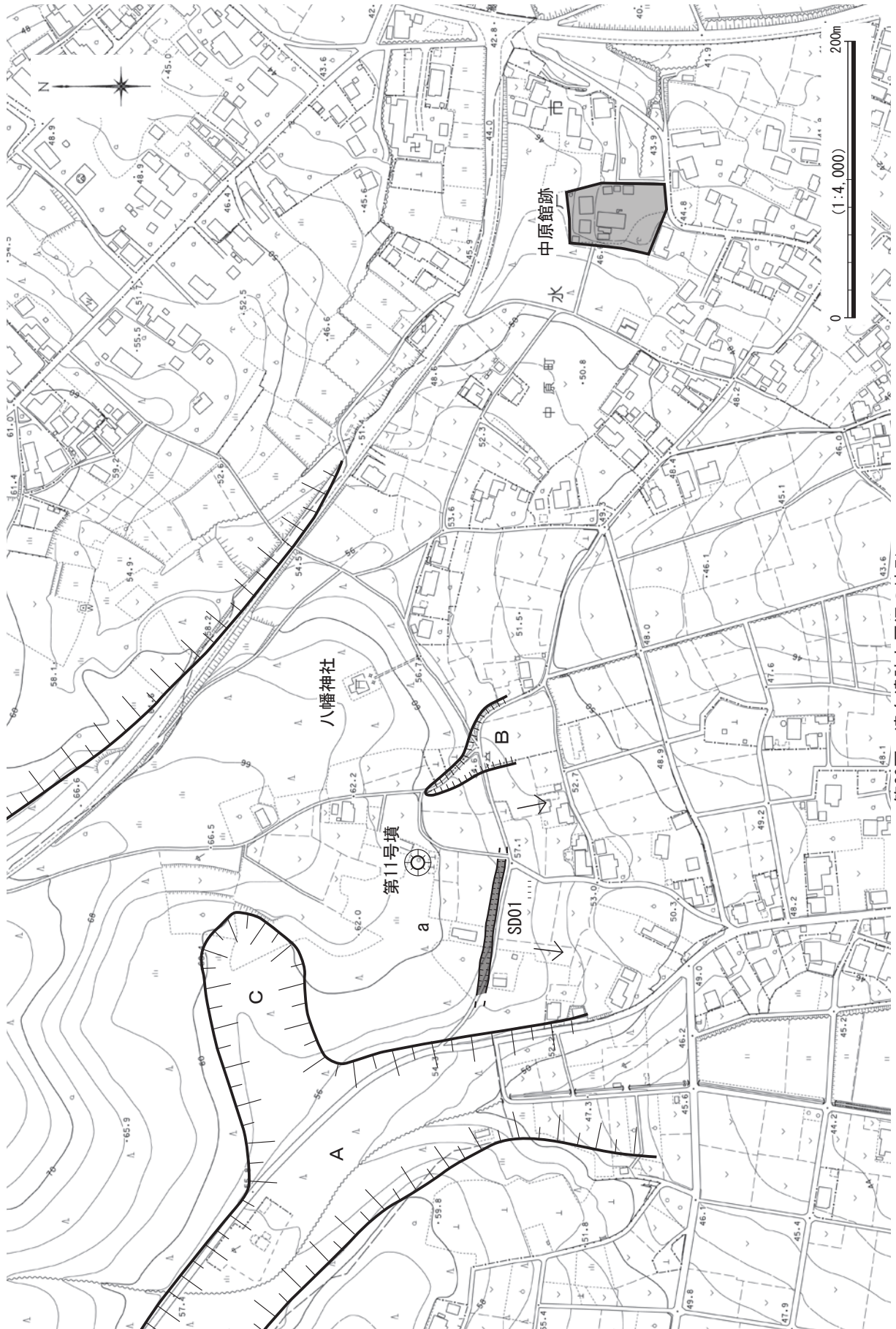
南北20.80mの範囲が発掘され、1.18mの深さを測ることが明らかになっている。周溝の底面は概ね平坦であるが、外側の立ち上がり部分には僅かな段差が認められることから、今次調査部分は周溝の中でも外側に位置していると判断した。これにトレンチ⑨で周溝の内縁、⑩で外縁を検出した試掘調査の成果を加え、墳丘を復元したのが第19図である。周溝の幅は6.5m程とみられ、形態については、北部分で上端が検出されたことから、南部分がやや直線状になるものの全体に緩やかに弧を描くと推定した。ここでは、試掘調査の成果と現況、直近で発掘された第13号墳（旧No.82）などの成果を踏まえ、円墳と理解しておきたい。周溝を除いた墳丘の規模は、直径約26mとなる。周溝を加えると直径約40mとなり、内原地区最大級の円墳である。

遺物の出土状態は、調査区が周溝の外縁近くに設定されたこともあってか、埴輪片の出土は調査区の西側、つまり墳丘側に偏在する。埴輪片は116点が得られ、その大部分は細片である。種別を判断できる資料は朝顔形埴輪や円筒埴輪であり、形象埴輪は発見されていない。全体に胎土は、長石・石英・雲母・チャート・白色粒を多量に含み砂っぽい質感であった。

時期決定については、埴輪と周溝覆土の中層と下層から出土した土師器の坏（SD01-1・2）が根拠になる。坏の形態は丸底で、体部は稜をもって口縁部は大きく外反し、一方、埴輪の内面は板ナデによる横方向の調整を主体とする。これらのことから第11号墳は、6世紀前半の築造と判断した。周辺地域で埴輪が得られている調査事例を参考にすると、牛伏4号墳よりも古く、杉崎コロニー87号墳とほぼ同時期に位置付けられよう。



第19図 八幡神社周辺古墳群第11号墳規模想定図



第20図 遠台遺跡と周辺の地形

第3節 遠台遺跡の性格と課題

遠台遺跡の調査成果を特徴付ける遺構は、調査区全域にわたって検出された堀跡である。ここでは重要な成果である堀跡が示す遺跡の性格を考えることにしたい。

まず立地であるが、堀跡は、台地の傾斜がはじまる縁辺部に構築されており、検出された全長はⅠ区 34 m、Ⅱ区 49 mの合計 83 mに及ぶ。Ⅰ区とⅡ区の間となる 20 m区間は、未調査であるもののⅠ区とⅡ区の状況から連続するのは疑う余地はなく、さらに東西方向へ延びることが明らかである。ただし、現況において調査区及びその周辺に堀跡の埋蔵を示唆させる地形の変化は捉えられていない。堀跡は多少のばらつきはあるもののN-78°-W方向に直線状で、100 m以上、最短でも一町にわたって掘られていることになる。

形状は薬研状で、上端幅は推定 5 m、下端幅 0.13～0.30 m、土層断面にみる深度は 2.20 m、現地表からは東端部で 2.95 m、西端部で 2.33 mを測る。覆土に土塁の構築土であるローム粒・ロームブロックの含有が顕著な、全体に粗い褐色土を観察でき、北側に土塁が設けられていた。堀内からは覆土の状態から堀跡に伴うと判断したピットが多数検出され、逆茂木あるいは柵が付設されていた可能性が高く、防御のための遺構と理解した。つまり遺跡分類では城館跡ということになる。

しかし、周辺の地名でこれを連想させるものは確認できず、さらに伝承なども伝わっていない。調査区周辺の地形を観察すると、第 20 図で示したとおり、調査区の西側には中央を小沢が南流する大きな開析谷 A が入り込み、さらにこの谷は調査区の立地する台地を回り込むように北側へ支谷 C を派生させる。東側も西側に比べて規模は小さいものやはり谷 B が入り込んでおり、台地の高所 a を囲い込む。この高所 a はほぼ平坦で、東と西、北の三方が限られているため、開けているのは南面だけである。この南へ向け傾斜がはじまる縁辺に SD01 を直線状に構築することで、高所 a をほぼ方形に独立させることになる。仮に堀が掘られた南を前面とするならば、眼下には奥州へ向けた街道が通り、水戸市街方面をも見渡せる立地条件を備える。検出された SD01 は、背後に構築された城館跡の南側を防御する横堀として機能したといえよう。

堀跡からの出土遺物は、13～14世紀と16世紀末～17世紀前半に大別される。13世紀代の遺物は常滑製品が大多数を占める。渥美製品もその可能性のあるものを含めると10点を数え、胎土は落ち着いた感じで、黒色粒や黒斑が顕著に認められることから、渥美・湖西系の製品として扱った。

発掘された茨城県内における13～14世紀の中世城館跡としては、本遺跡と同じ水戸市に所存する白石遺跡、つくば市の島名前野東遺跡、龍ヶ崎市の屋代B遺跡などが挙げられる。白石遺跡は那珂台地の南西端に立地し、13～16世紀中葉まで営まれ、全体で四期の変遷が捉えられている。その内のⅠ期が13～14世紀前葉に比定されており、幅1 m、深さ0.20 mの浅い溝によって、一辺が約80 m四方の方形に区画されていた(茨城県教育財団 1993)。土塁は設けられておらず、防御の意識に乏しい状況である。東谷田川が形成した河岸段丘上の縁辺部に立地する島名前野東遺跡では、13世紀後半～14世紀前半にかけて、幅3.6～5.6 m、深さ1.2～1.5 mの箱薬研の堀が調査されており、やはり土塁は伴っていない(茨城県教育財団 2002)。土師質土器皿の出土量が多いことが特徴的である。屋代B遺跡は、稲敷台地の平坦部に立地し、三期にわたっての変遷が確認されている。Ⅰ期の鎌倉後半～南北朝初期に比定される堀は、幅2.5 m前後、深さ1.5 mで、東西60 m、南北80 mの方形に区画されていた(茨城県教育財団 1988)。「屋代館」とも呼べる形態で、土塁の存在は報告されていない。これらからは貿易陶磁器や土器製品の出土はみられるものの、鎌倉時代の堀には土塁を伴わないようである。

これに対し遠台遺跡第 18 地点の調査成果では土塁を伴っており、逆茂木あるいは柵の痕跡が認められ、防御の意識を汲み取れる。しかも、13 世紀代の遺物には貿易陶磁器はおろか土器類は含まれていない。一方、堀の下層をはじめとしつつ出土した 16 世紀末～17 世紀前半に比定される資料には、国産ではあるものの茶陶が確認され、土師質土器皿、さらに内耳鍋等の日常雑器が含まれるなど、13 世紀代に比べ生活感がある。このことから堀の構築時期を 16 世紀末～17 世紀前半に比定し、13～14 世紀の遺物は流れ込みと判断した。前述したように常滑製品の甕、片口鉢を主体としており、これらの器種は蔵骨器とその蓋に再利用されるものでもある。中世墓は古墳や経塚など聖なるものを中核に形成される場合が多いとされ、県下では、石岡市の要害山 3 号墳のように古墳に結縁して埋納された蔵骨器が発見されている。全国的にみて蔵骨器を使用した葬送儀礼は中世前半に集中する現象とも符合する（小野正敏編集代表 2001）。

では、16 世紀末～17 世紀前半の当地における歴史的展開をみてみよう。

戦国時代の当地は、江戸氏の勢力下にあった。江戸氏は水戸市の河和田城、次いで水戸城を本拠に、中妻 33 郷を支配したが、遺跡の所在する中原は中妻 33 郷に含まれる。『内原町史』によると、江戸時代から明治時代へかけて編纂された『新編常陸国誌』を引いて、中原には江戸氏系城館跡の中原館が存在し、国井善之輔が拠点にしていたとする。

現在中原館は第 18 地点の東 450 m に位置し、本調査区と比べ低地に立地していることがわかる。しかも、東西 50 m、南北 70 m と規模は小さい。この江戸氏も、豊臣秀吉の全国統一の過程で、天正 18 年（1590）佐竹氏によって滅亡し、歴史の表舞台から姿を消す。その後中原は佐竹氏が治めるも関ヶ原の戦いの結果、佐竹氏は秋田に転封となり、水戸徳川家の支配地になった。

今回出土した 16 世紀末～17 世紀前半の近世初頭の遺物には、志野製品や瀬戸・美濃製品の輪禿皿が含まれており、この歴史的な変遷を踏まえると、堀跡（SD01）の構築は江戸氏の時代ではなく、次の佐竹氏と水戸藩の初期にあたっていると解釈できる。『内原町史』の記述に従うならば、江戸氏の時代には中原館が機能していたであろうから、本遺跡の城館跡は、江戸氏を滅ぼして新たに当地に進駐してきた佐竹氏によって築かれたと考えるのが妥当のように思われる。中世の館跡である中原館では手狭であったのか、もしくは何らかの理由で使用には不都合であったのであろう。少なくとも地形的な観点からは、遠台遺跡第 18 地点の方が防御には適している。

ただし、この時期に構築される空堀としては規模が小さく、とくにその幅は狭い。推測の域を出るものではないが、おそらく本格的な築城はなされず、最低限の防御施設に留めたものであって、その構築の意図は支配者の交替を表現し、施設の区画を重視していたものかもしれない。軍事拠点というよりは、支配のための政庁として、人心の安定と把握など地域統治の要素が強そうである。この視座に立つならば、佐竹氏から水戸藩初期の段階という短期間で機能を停止したために、地名や口伝が残らなかったとしても説明が付く。東方に隣接する八幡神社の創建年代は明らかではないものの、慶長 5 年（1600）の関ヶ原の戦いの頃と伝えられていることは（内原町史編さん委員会 1996）、単なる偶然ではあるまい。

また、注目されるのは、遠台遺跡第 18 地点と八幡神社周辺古墳群第 1 地点から合計 11 点の炉底塊・鉄滓が出土している点にある。何れも割られており、大多数は製鉄炉の炉底塊とみられることから、製錬段階を示す資料と認識され、調査区の周辺に製鉄遺構の埋蔵を示唆する。時期は不明ながら、着磁性が極めて弱いため、技術の高さを反映するものと仮定すると、古代ではなく中・近世に比定される遺物の可能性を指摘できる。本遺跡北方に位置する有賀台地の塚原では、戦後砂鉄の採取が行われ

ており（内原町史編さん委員会 1996）、興味深い事例である。これらの鉄塊系遺物は調査区内に偏りが認められないことから、発見された城館跡は、製鉄に関わる施設と関係していたとみられる。

このように遠台遺跡第18地点の周辺には、近世初頭において城館跡が営まれていたが、残念ながら実態については不明のままである。調査は広大な遺跡範囲の一部分において実施されたものであって、出土資料もまた、限定的であることは否めず、現時点ではこれ以上踏み込んで明らかにすることは難しい。しかも、茨城県の近世初頭はめまぐるしく領主の交替が行われるなど、不透明な時期にあたっている。その意味においても発見された堀跡は、地域の中世末～近世初頭という時代の転換期を知るうえで重要な遺構といえよう。得られた知見は大きな成果であると同時に多くの課題を示しており、今後へ向け注視すべき遺跡であることを物語っている。（間宮）

主な引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2012 『愛知県史』別編窯業3 中・近世 愛知県
 渥美町郷土資料館 1999 『渥美古窯と東大寺瓦』
 茨城県教育財団 1988 『屋代B遺跡Ⅲ』茨城県教育財団文化財調査報告第45集
 茨城県教育財団 1993 『白石遺跡』茨城県教育財団調査報告第82集
 茨城県教育財団 2002 『島名前野東遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第215集
 茨城県考古学協会 2011 『茨城中世考古学の最前線 ～編年と基準資料～』
 茨城県陶芸美術館他 2010 『古陶の譜 中世のやきもの -六古窯とその周辺-』
 内原町教育委員会 1982 『内原町古墳一覧表』
 内原町教育委員会 八幡神社周辺古墳群発掘調査会 1985 『八幡神社周辺古墳群12号墳発掘調査報告書』
 （※本報告書では第13号墳に訂正）
 内原町教育委員会 1997 『八幡神社周辺古墳群（内原81号墳）他発掘調査報告書』
 （※本報告書では古墳番号をNo.80に訂正）
 内原町教育委員会 国士舘大学牛伏4号墳調査団 1999 『牛伏4号墳の調査』
 内原町史編さん委員会 1994 『内原町史資料第2集 内原町の遺跡 -内原町遺跡分布調査報告書-』
 内原町史編さん委員会 1996 『内原町史』通史編 内原町
 小野正敏編集代表 2001 『図解・日本の中世遺跡』 東京大学出版会
 齋藤 弘 1999 「中世墓における古墳の再利用」『HOMINIDS』2号 CRA
 山武考古学研究所 新治村教育委員会 2001 『高崎山古墳群西支群 第2号墳・第3号墳』
 全国シンポジウム「中世窯業の諸相」実行委員会 2005 『中世窯業の諸相 ～生産技術の展開と編年～』
 地図資料編纂会 1989 『明治前期 関東平野地誌図集成 1880（明治13）年～1886（明治19）年』 柏書房
 土岐市美濃陶磁歴史館 1993 『大坂出土の桃山陶器』 大阪市文化財協会
 日本窯業史研究所 1980 『杉崎コロニー古墳群』日本窯業史研究所報告第10冊
 兵庫埋蔵銭調査会 1996 『日本出土銭総覧』
 藤澤良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要』第10輯 瀬戸市埋蔵文化財センター
 常陸大宮市教育委員会 2018 『中崎遺跡Ⅱ』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第32集
 水戸市教育委員会 2016 『河和田城跡（第26・28地点）』水戸市埋蔵文化財調査報告第71集
 宮崎報恩会 1969 『新編常陸国誌』 崙書房

おわりに

今次調査は、僅か2 m幅のトレンチ調査区を余儀なくされたが、古墳時代後期前半、中世前期、中世末～近世初頭においてそれぞれ注視すべき成果を見た。以下にその要点を改めて述べ、まとめに代えたい。

*

遠台遺跡の調査では、全長100 m以上と推定される堀跡(SD01)の検出が特筆される。従来、中原地区では中原館跡の存在が知られ、既往の調査からも中原支丘縁辺部に中世遺構群が展開することは想定されていた。一方、今次調査で土塁を備えた堀跡が中原館跡から約500 mも離れた地点で新たに発見されたのは想定外の出来事であり、その性格の考究が地区の歴史を窺う重要な作業となることは明かであった。

こうした中、第5章において間宮が叙述した中世景観の復元は示唆に富む。特に小谷とSD01により100～150 m四方の空間を構築したという指摘は卓見と言えよう。そしてこの空間が、江戸氏没落後、常陸統一を成した佐竹氏が普請した新たな城館であると、間宮は想定する。一方筆者は、内原地区に多数の城館が築かれた要因の一として、当該地区が江戸氏の南下政策により小田・小幡各氏の勢力圏に近接する軍事的緊張を帯びた地域であったためと認識している。こうした文脈から間宮の説を省みると、佐竹氏の時代に城館を再構築するほどの軍事的緊張が果たして存在するのか、という疑問が生じる。事実、内原地区の中世城館にまつわる伝承では、江戸氏由来の人物が圧倒的で、佐竹氏由来のそれは極めて少ないのである。

そこで筆者は、この空間の性格について、佐竹氏の鉾山関連遺跡の可能性についても検証していくことを提起したい。周知のように佐竹氏は積極的な鉾山経営を展開し、有賀地区にある有賀金山跡(第3図)もその一つとされる(内原町史編さん委員会1996)。同金山跡と今次調査区とは約1 kmの距離で、支丘を一にしているため往来も容易である。また、今次調査で検出した11点の炉底塊・鉄滓は、周辺における鉾山関連遺構の存在を示唆しており、この空間が製錬施設(床屋)であった可能性をも示唆しているのである。

* *

八幡神社周辺古墳群第1地点では、同古墳群第11号墳の周溝を検出し、周溝内径26 m、外径40 mを測ることが判明した。構築年代は6世紀前半で埴輪を有する。内原地区の円墳のうち、径25 m以上のクラスは15%未満であり「特別な被葬者に許された規模」とされる(内原町教育委員会他1999)。第11号墳の墳丘規模は17.6 mに過ぎず、中程度の普遍的な古墳と見られていた(内原町教育委員会1982)。しかし、今次調査により25 m級の大型古墳に属することが判明したことは、従前の理解に再考を促す大きな成果であり、ここに改めて強調しておきたい。そもそも、本古墳群は13基中9基が20～30 m級の径を有するなど、大型古墳の分布率が際立って多い傾向にあるが、こうした事実はあまり注目されてこなかったようである。今後、内原地区北部の古墳群の編年や性格を窺う上で注視していくべき事柄と言えよう。

* * *

今次調査でさらに注目すべきは、表紙に掲載した線刻を有する小型壺をはじめ、中世前期の渥美・常滑産の壺・甕等23点を検出したことである。水戸市内において該期の遺構・遺物が発見されることは稀であり、遺構外出土ではあるが内原地区における中世前期の土地利用を物語る貴重な物証となることは疑いない。間宮はこれらの遺物群をして古墳に結縁する蔵骨器の可能性を指摘したが、このことは八幡神社周辺古墳群が中世びとにとって結縁すべき聖地として認知されていたことを示唆している。図らずも中世前期の遺物群は、今次調査の主体をなす古墳時代と中世とが交錯する、象徴的存在となったのである。

以上のように、今次調査で得た成果は多い。そして、それに比例するように今後検証すべき事柄も多い。大方の批評をお待ちするとともに、今後の調査・研究の進展を志したい。(関口)

写真図版





遠台遺跡 遠景（南から）



I区 現況（東から）



II区 現況（南西から）



TP01 基本堆積土層（南から）



TP02 基本堆積土層（北から）



I区 全景 (西から)



同 全景 (東から)



SD01 土層断面B (東から)



同 土層断面C (東から)



同 礫出土状況 (北から)



同 構築状況 (東から)



Ⅱ区 全景（東から）



同 全景（西から）



SD01 東端部の構築状況と堆積土層（南西から）



SD01 土層断面 F (東から)



同 土層断面 G (東から)



同 土層断面 H (東から)



同 土層断面 I (東から)



II 区 SD01 構築状況 (東から)



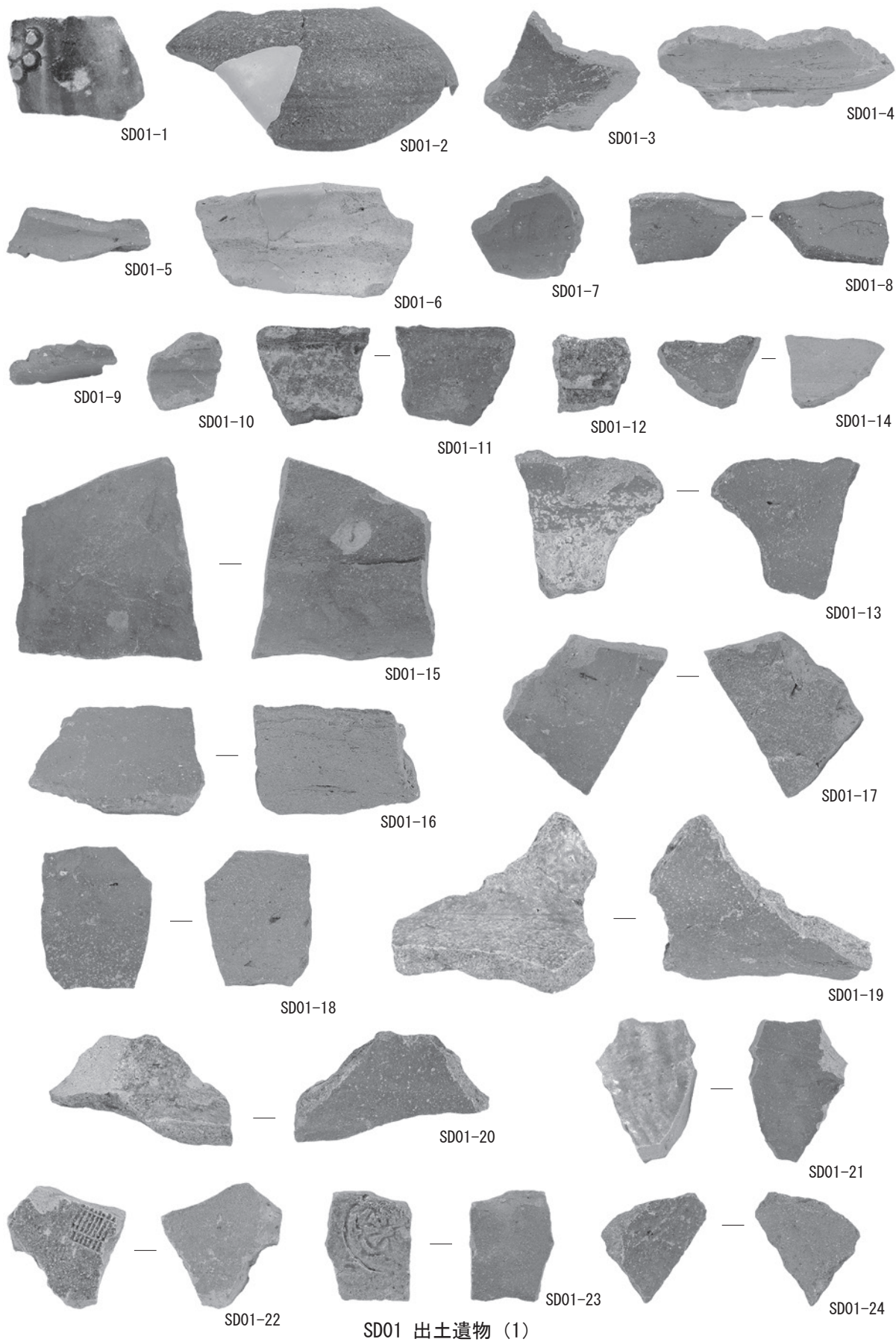
同 西端部ピット検出状況 (東から)

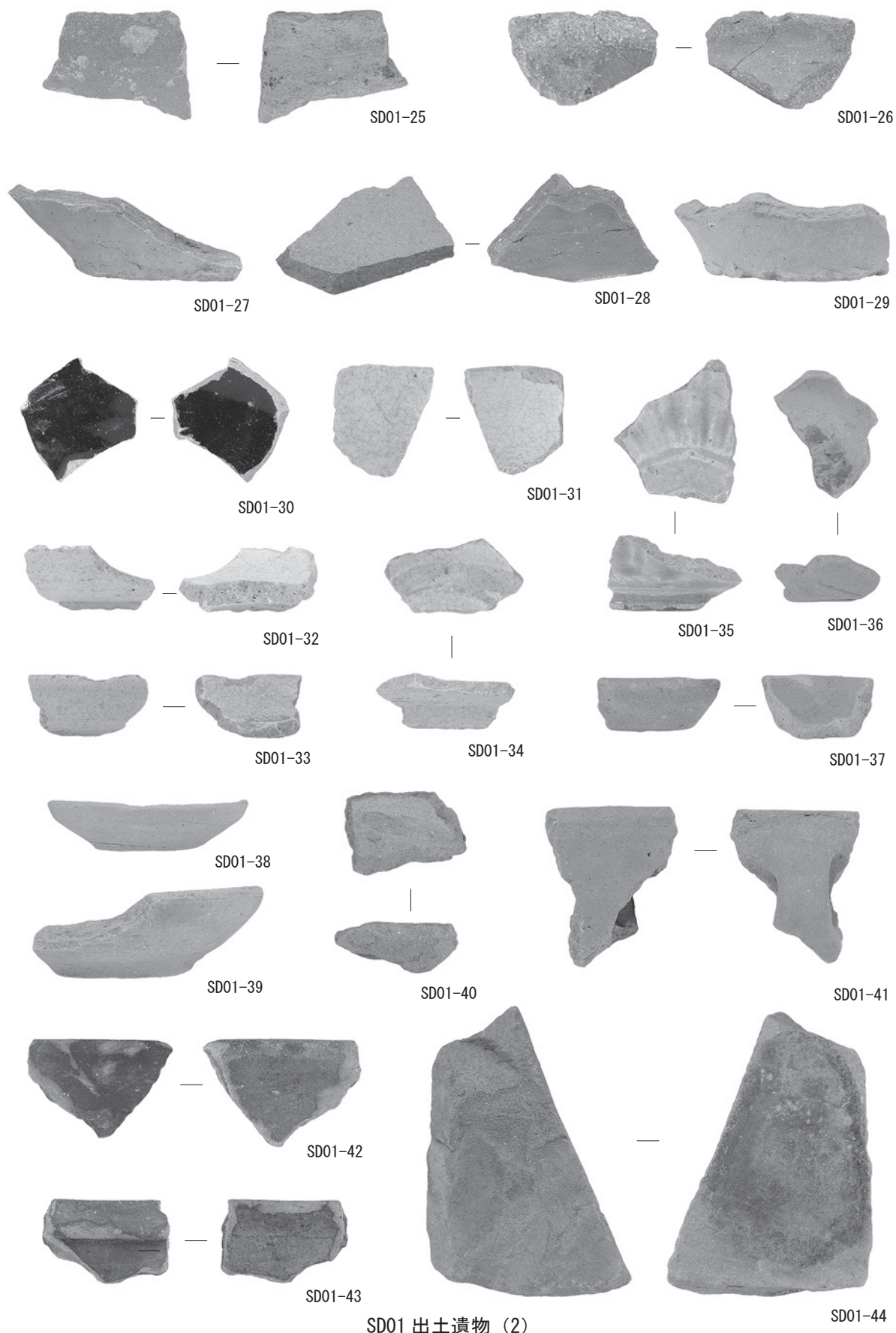


同 東端部ピット検出状況 (北から)

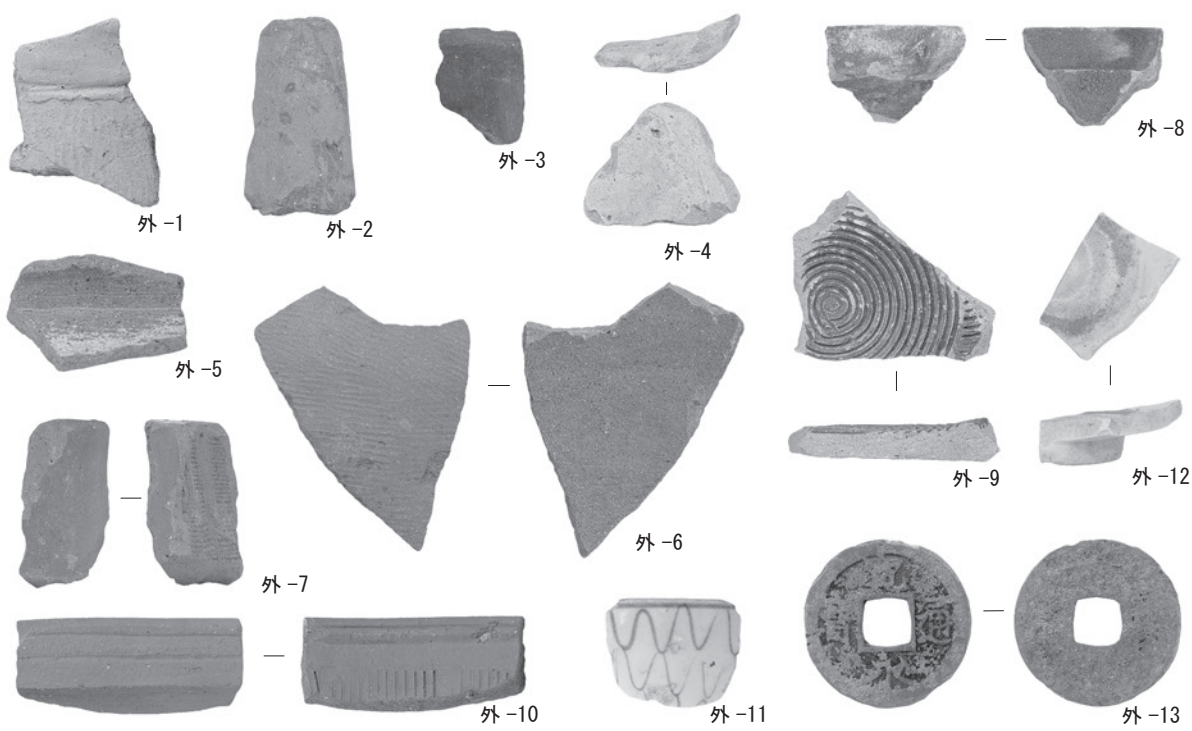
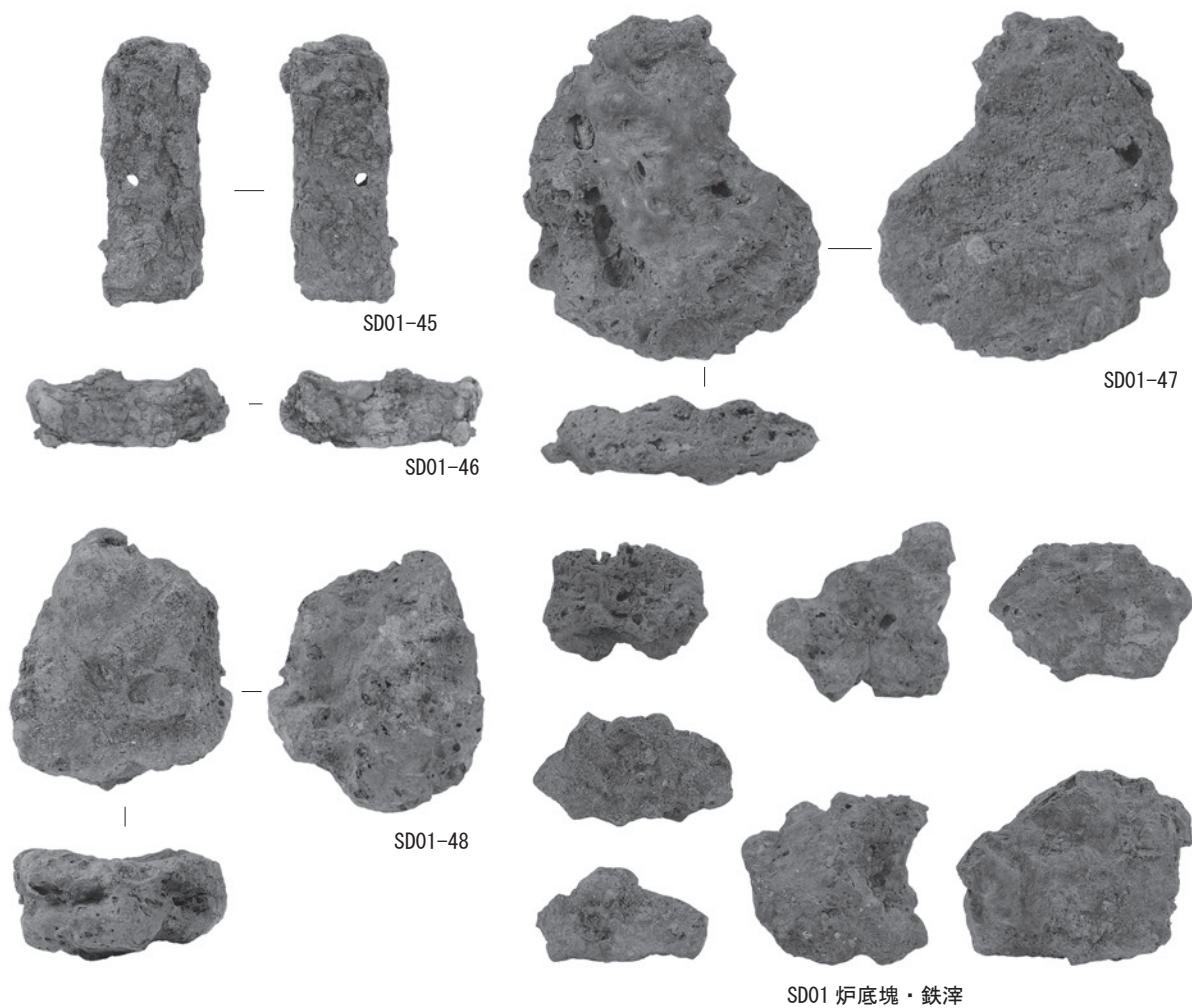


SE01 全景 (北から)





SD01 出土遺物 (2)



SD01, 遺構外出土遺物



八幡神社周辺古墳群の調査区と第11号墳（北東から）



調査区 現況（南から）



調査区 現況（北東から）



TP01 基本堆積土層（北から）



遺構確認状況（北東から）



調査区 全景（南西から）



SD01 土層断面（南西から）



同 土層断面A（南から）



同 土層断面B（南西から）



同 土層断面C（南西から）



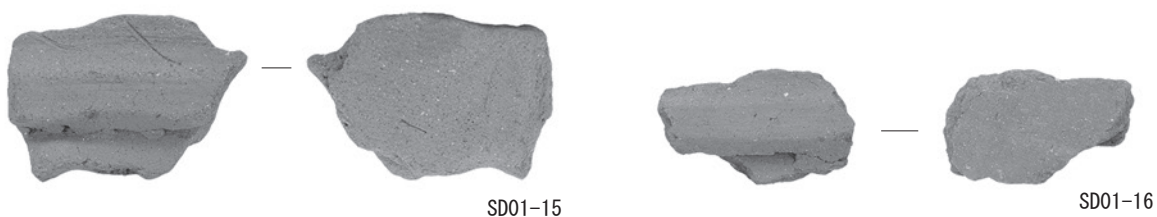
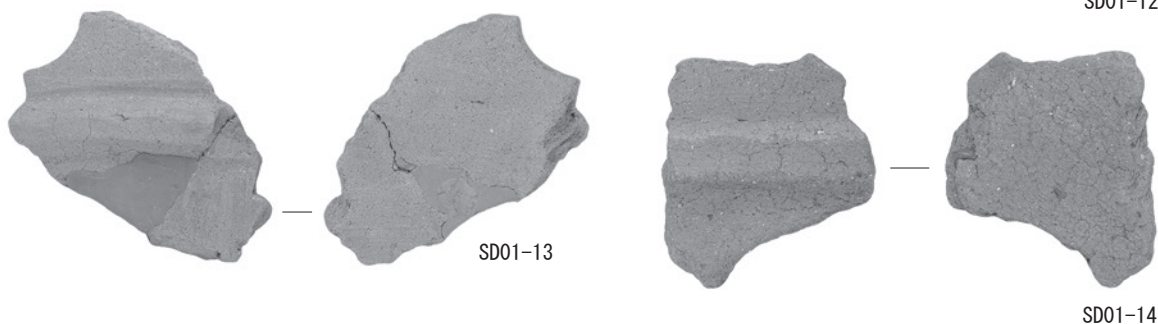
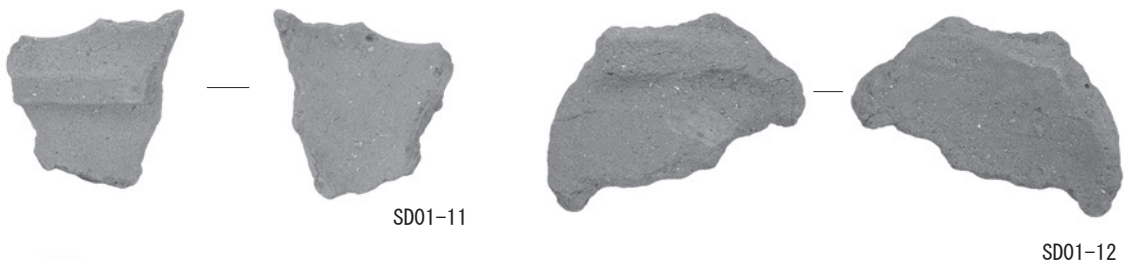
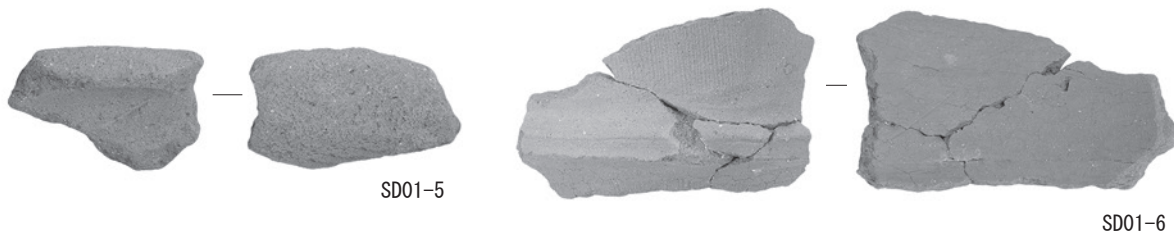
同 遺物出土状況（南西から）



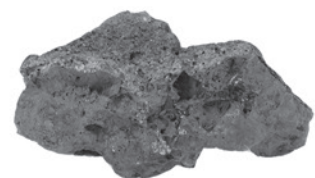
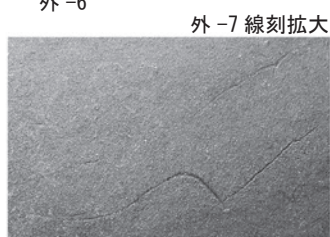
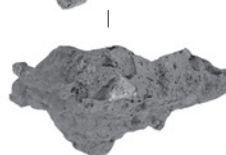
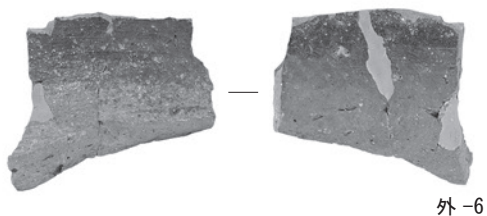
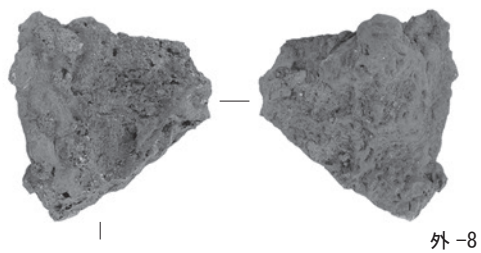
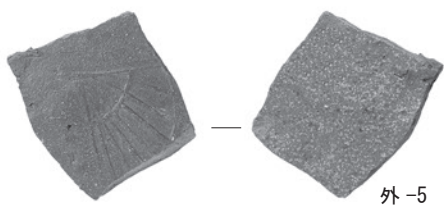
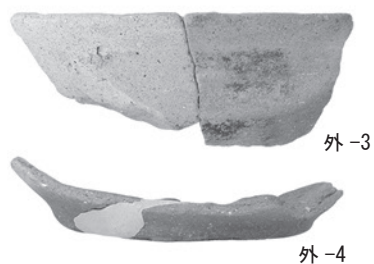
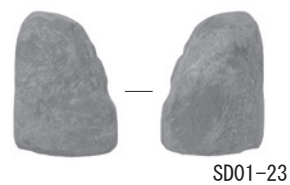
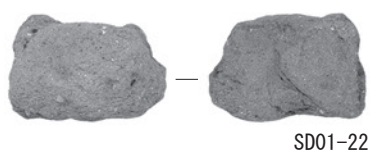
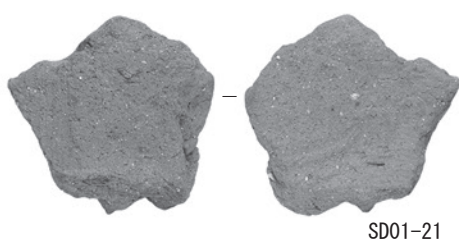
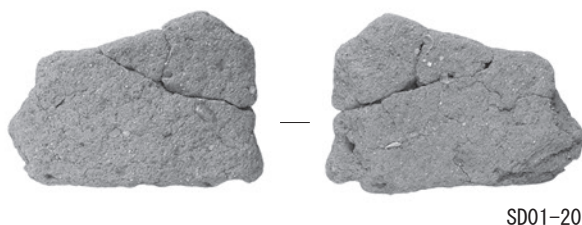
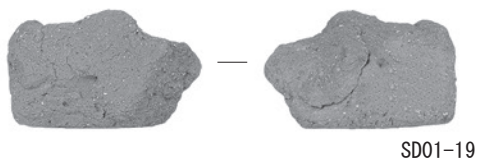
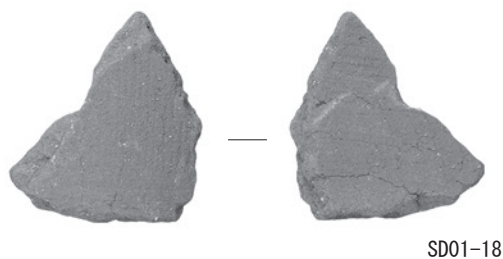
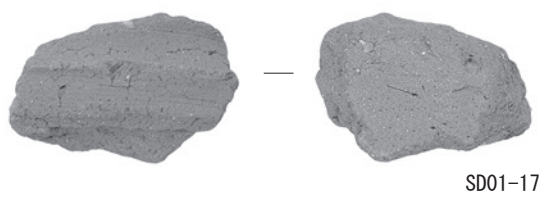
同 遺物出土近景（北東から）



同 遺物出土近景（北東から）



SD01-15
SD01 出土遺物



SD01 炉底塊・鉄滓

SD01, 遺構外出土遺物

抄 録

ふりがな	とおのだいせいせき だいじゅうはちちてんだいよじ・はちまんじんじゃしゅうへんこふんぐん だいいちちてんだいさんじ							
書名	遠台遺跡（第18地点第4次）・八幡神社周辺古墳群（第1地点第3次）							
副書名	那珂川沿岸農業水利事業（二期）高根幹線水路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告第102集							
編集者名	間宮正光							
著者名	間宮正光, 米川暢敬, 関口慶久							
編集機関	株式会社地域文化財研究所 〒270-1327 千葉県印西市大森 2596-9 TEL 0476-42-7820							
発行機関	水戸市教育委員会 〒310-0852 茨城県水戸市笠原町 978-5 TEL 029-306-8132 （担当）教育委員会事務局教育部歴史文化財課埋蔵文化財センター 〒311-1114 茨城県水戸市塩崎町 1064-1 大車貝塚ふれあい公園内 TEL 029-269-5090							
発行年月日	2018年（平成30年）8月27日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
とおのだいせいせき 遠台遺跡 だい （第18地点第4次） はちまんじんじゃ 八幡神社 しゅうへんこふんぐん 周辺古墳群 だい （第1地点第3次）	いばらきけんみとし 茨城県水戸市 すぎさきちよう 杉崎町 2267 付近 ～ なかはらちよう 中原町 1020 付近	8201	002 ----- 011	36° 23' 05"	140° 21' 06"	20180215 ～ 20180403	259.6 m ²	那珂川沿岸 農業水利 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
遠台遺跡	城館跡	中・近世	堀跡 1条 井戸跡 1基	縄文土器, 土師器, 須恵器, 瓦, 陶器（古瀬戸, 常滑, 渥美・湖西系, 瀬戸・美濃, 明石・堺系）, 土師質土器, 瓦質土器, 磁器（肥前系） 銭貨, 石製品, 鉄製品, 炉底塊・鉄滓		遠台遺跡では, 近世初頭に構築されたとみられる空堀が調査された。 八幡神社周辺古墳群では, 第11号墳の規模が推定され, 6世紀前半の朝顔形や円筒埴輪が出土した。なお, 13世紀の渥美・湖西系製品の壺には線刻が認められ, 絵が描かれていた可能性もある。		
八幡神社 周辺古墳群	古墳	古墳時代	周溝 1条	弥生土器, 土師器, 須恵器, 石製品, 埴輪, 陶器（常滑, 渥美・湖西系）, 炉底塊・鉄滓				
要約	遠台遺跡からは, 堀跡が検出され, 13～14世紀と16世紀末～17世紀前半に二分される遺物が出土している。前者は常滑製品の数量が多く, 後者は瀬戸・美濃製品が主体になっていた。堀跡は推定幅5mで, 直線状に100m以上にわたり構築され, 近世初頭に機能した城館跡の一部と判断される。 八幡神社周辺古墳群では, 現存する第11号墳の周溝が検出されている。第11号墳の形態は円墳で墳丘の直径は26m, 周溝の上端幅は6.5mと推定された。周溝内からは, 朝顔形と円筒埴輪, 土師器の坏が出土しており, 6世紀前半に比定した。							

水戸市埋蔵文化財調査報告第102集

遠台遺跡（第18地点第4次）

八幡神社周辺古墳群（第1地点第3次）

那珂川沿岸農業水利事業（二期）高根幹線水路工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成30（2018）年8月23日 印刷

平成30（2018）年8月27日 発行

編集 株式会社 地域文化財研究所

発行 水戸市教育委員会

印刷 株式会社 ライフ TEL0476-24-1564